『聖剣の門』 -秋月円命流奥伝- 巻の一

伊南村京一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
『聖剣の門』　―秋月円命流奥伝―　巻の一

【Ｎコード】
Ｎ８１４７Ｆ

【作者名】
伊南村京一

【あらすじ】
江戸開府から１８０年余。円熟を迎えようとする町人文化と商業経済の発展に華やぐ都市。天候不順や大噴火による度重なる飢饉に喘ぐ農村。揺らぐ幕藩体制を懸命に支えようとする老中・田沼意次と盟友官僚達。これに対し、権勢のみを手中に収めようとする刑部卿・徳川治斉の暗躍。混迷を深めてゆく世情と暗雲立ち込める政局を背景に、家康が黒田家へ託した秘書をめぐり、天命を負う若き剣者・新免右京之典へ次々と刺客が襲いかかる。“戦の無い安寧の世”と黒田家、そして自らの愛すべき人々の為に、奥義・秋月円命流

の秘剣を縦横無尽に揮う右京之典が真っ直ぐに立ち向かう。爽やかなる眼と心を持つ眠れる若き剣者の永きに亘る戦いが今、始まる！

一章、古処千日参禅（前書き）

「歴史」ジャンルにカテゴライズしていますが、歴史小説でなく『時代小説』です。登場人物や出来事の多くも、実際の歴史を基にしてかなり忠実に描いていますし、時代考証や史実・風俗等においても、なるべく忠実にと調査・研究した上でとの考えで執筆しておりますが、主人公を初め、“あくまで『フィクション』です”。また、描かれる実在の人物や歴史描写において、解釈の違いや好き嫌い、また今後、文章中の表現に、現代では受け入れられない表現等が出てくる場合もあるかもしれませんが、あくまでその時代をより的確にあらわす為のみであり他意はありません。創作の文学作品ですので、これらをご理解いただいた方のみ閲覧くださいませ。（２００４．冬頃に文庫相当４００ページくらい執筆していたものを再チェックしながらアップしています）

一章、古処千日参禅

一、古処千日参禅

「ハッ、ハッ、ハッ、ハッ、ハッ」

ひたすら山道を登る息遣いだけが、深い雪に覆われた険しい細道を頂へと向かっていた。

日頃は修験者が行き交う山道も、さしもの大雪に野兎の他には出会う者とてない。

始めには、木々が庇となって道を覆う雪を防いでくれた処もあったが、登るにつれて、膝の辺りまで、時には吹き溜まりの中、腰の辺りまでも埋まりながら只ひたすら進む行程であった。

「ハッ、ハッ、ハッ…」

規則正しく続いていた息遣いが不意に途切れ、一瞬だけ立ち止った若者が右手を振り見ると、木々の間に大きく視界が開けた。

未だ雪のちらつく仄暗(ほのぐら)い谷間から見下ろす城下も里も、全てが白く覆われていた。

この冬は例年になく雪が多く、昨日の昼前から降り続いた雪は、麓では一尺ほどに積り、見下ろす下界は川以外、野も畑も、道さえも区別が付かなかった。

九州の地に、神々が住まいする阿蘇や高千穂などの高地でも無いのに、このように雪深い土地があろうとは、他所(よそ)に暮らす人々は思うまい。

だが若者は気にする事も休む事も無く、ひたすら深雪(しんせつ)の山道を登って行く。

若者にとって、子供の頃から何度も登った、そしてこの三年近くは一日たりとも休むことなく踏んで来た通いなれた道だ。

たとえ滅多に遭わぬほどの大雪であろうとも、自分の庭のような山で、雪ごときに勘を狂わされて道を踏み外す様な事は無い。

五尺五寸（約１６７ｃｍ）ほどの均整の取れた身体が、雪を掻

き分け掻き分け、山道をぐんぐん進んで行く。
　またしばらく行くと、十ニ、三尺はあろうかという切り立った大岩に行く手を塞がれたが、これを乗越えれば山頂まではもう一息だ。
　若者は嬉々として岩肌に穿(うが)たれた鎖に取り付き、一気に岩壁を登りきった。
　頂を目指そうと再び進みだしたとき、三、四間ほど先の黄楊(つげ)の枝々に積もった雪が雪煙とともに突然崩れ落ち、不意に左手の雪に覆われた笹群が割れた。
（しまった！）
　雪で気配が消されていたとはいえ、感付くのが遅れたと自分を悔いながらも、若者は次の瞬間には背中を丸めて自ら後ろに転がり、突然現れた大きく黒いものを一気に後方へと投げ飛ばしていた。
　振り向くと三間ほど後ろの杉の大木の根元に、三十貫（約１１５ｋｇ）はあろうかと思われる大猪が気を失って倒れていた。
　若者が猪に近づき、右の掌で猪の肩口を突くと、倒れた猪が俄かに気を取り戻し、
　―何が起こったのか解らぬ―
という態で目を回しながらも、よろよろと笹群の中に戻っていった。
「ふぅー」
っと若者は小さな溜息を一つ吐いた。
　―未だ修行が足らぬ。たまたま身動きの取れる、雪の浅い所だったから助かっただけだ―
　そう思いながらも、最後の登りを頂へと向かった。
　雪は既に止んでいた。
　しかし、まだ薄暗い夜明け前の山頂には、雪に覆われた幾つもの巨岩が累々と横たわり、その真中に二つに割れた一際大きな岩が聳(そび)えていた。
　その昔、雷によって割られたという大岩によじ登り、雪を払い落として背中の木刀を降ろすと東に向い静座した。

岩肌は凍るように冷たかったが、夜半過ぎから二刻以上ひたすら登り続けた若者の身体には却って気持良く感じられる。
双眸を閉じ、気息を鎮め、無心になり、ただひたすら日の出を待った。
一人きりの山頂に無音の時が流れ、大岩に座してから凡そ四半刻（三十分）。
正面から左右の瞼に紅い光が射し、顔に熱が伝わってくるのが分かった。
若者は、日の出を全身に感じるとゆっくりと立ち上がり、目を見開いた。
すると、遥か彼方、輝く日輪に照らされて豊前豊後の峰々が連なる、神韻縹渺とした風景が目に映った。
北に伸びる尾根には、藤原純友の乱を鎮圧した大蔵春実の子孫が、建仁の昔に築いたという秋月城の址が静かに横たわり、南に目を転ずると遠く阿蘇の高峰が望め、西には、背振と耳納の山々に囲まれた大平野を雪が白一色に染め上げ、その真中を一本の大河が、筑前と筑後の二国を分けて悠然と貫いていた。
若者は腰の竹筒を外すと、手を清め、懐から出した手ぬぐいに浸して顔を拭い、次に口に含み静かに飲み降した。
これは、中腹に小さな祠が築かれ、その裏手の岩場から滴り落ちる、霊験灼たかなる清水であった。
暦の上では、今年の立春は十五日であったが、
―春立てる日の若水に―
と想い立ち、登りの途次に竹筒に汲んでおいたのだ。
天明四年（一七八四）正月遡日の朝日に向かって二拝すると、若者の唇から祓詞が流れ出した、
「掛けまくも畏き伊邪那岐大神、筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原に御禊、祓へ給ひし時に生り坐せる祓戸の大神等…」
玲瓏としたその声に、山頂の空気は次第に研ぎ澄まされ、まるでそこにあるものを超越して八方の空へと響き渡って行くようだった。

「…諸々の禍事、罪、穢あらむをば祓へ給ひ清め給へと白す事を聞こし食せと、恐み恐み白す～」

次いで、古処山への千日の参禅が無事終えたことを謝し、世の安寧と領主・長堅公の病平癒を祈願して、拍手を二つ打って後、再び一拝した。

（母上、右京之典は二十歳になりました）

若者は心の中でそう問い掛けると、懐から一尺ほどの錦の布に包れたものを取り出した。

布袋の紐をほど解くと、出てきたものは一振りの短刀であった。詳細は解らぬが、この短刀は世に「左文字」として知られた南北朝期の筑前の刀工「左衛門三郎吉安」の作といい、一年ほど前に亡くなった母の形見であった。

左衛門三郎は正宗十哲にも数えられ、鍛えた刀は数々の伝説に彩られる名人であった。

「母の命はもはや永くはありませぬ。この短刀はそなたを身篭ったとき、そなたのお父上様が下されたものです。そなたは大いなる天命を負い、この世に生をう享けたのです。その定めから逃れようとせず、どのような時もそなたの心の想うままに行きなされ。そなたなら必ずやそれが出来ましょう程に」

そう言い遺し、この短刀だけを託して母が亡くなったのは、薄紅の梅の花が儚くも清く咲き出した頃であった。

父の名も、その『天命』についても明かさぬまま、母は、短刀に後世つけられたという『小夜左文字』の銘と、その名の由来となった、

―年たけて　また超ゆべしと思ひきや　いのちなりけり　小夜の中山―

との、二度目の奥州路を踏んだ西行法師が詠んだ歌のみを教えてくれた。

その小夜左文字を新玉の年の来光に翳し、これから自らの運命が何か大きく変わっていく予感に不安と期待を抱きつつも、

（天命を全し、生きておらば、またいつの日かお会いできましょうや…）

たとえ何事が起きようとも、母の遺命に従い、天命に逆らうことなく、人の道に照らして、己の信じる道を往くのみと誓った。

九州筑前国中南部の嘉麻、夜須、下座、上座の四郡の中心に聳える霊峰、『古処山』は、凡そ二千九百尺（八六〇m）。天明のこの頃は天台宗の修験道場として栄えていた。

その西麓に、三方を山に囲まれて、筑前福岡の太守・黒田家の分家である秋月の城下町はあった。

武家屋敷と僅かな商家が軒を寄せ合い、箱庭のような町中を野鳥川が流れ、その小ささの割には寺が多く、その佇まいと澄んだせせらぎは、まるで小京の趣であった。

この地は、関が原の合戦の後、黒田長政が筑前と豊前の一部、五十二万余石を封ぜられて以来、黒田家が治めてきたが、もともとは鎌倉将軍から大蔵氏一族の原田氏が秋月の荘を拝領し、やがて秋月氏を名乗り数百年の間守ってきた土地である。

長政には三人の男子がいたが、嫡男である忠之は幼少の頃より粗暴・暗愚であったため、長政は一時、廃嫡も考えたという。

将来を危惧した長政は遺言によって、二男・長興に南部の秋月五万石、三男の高政に東部の東連寺四万石をそれぞれ与え、代々の安定を図った。

その後、東連寺黒田家は五代・継高が、後継ぎの絶えた本家の養子となったため享保五年（一七二〇）廃されたが、秋月黒田家は幾多の危機を乗越え、七代・長堅の時代を迎えていた。

江戸初期の黒田家家臣の学者、貝原益軒は妻・東軒の故郷である秋月について、その著書『筑前国続風土記』の中で、

―この里山林景色うるはしく薪水の便よく材木乏しからず。且つ山中の土産多き事国中第一也―

と述べている。

しかし、僅か五万石の小名にとって、江戸参勤、幕府よりの諸役賦課は大きな財政的圧迫であり、長興が没し、二代・長重が就位する寛文の頃（一六六五）には既に財政は窮乏状態で、相次ぐ飢饉や風水害がそれに追い討ちをかけた。

これを克服する為に領主以下、家臣の家族、奉公人に至るまで、衣服から食事の内容までを細かく定め、倹約に次ぐ倹約で支出を抑え、葛、和紙などあらゆる産物を特産化し殖産を奨めた結果、少しずつではあるが財政が好転し、明和の頃（一七六四）から天明のこの時期まで、二十年近くで二万金に及ぶ備蓄金が蓄えられた。

順風満帆に見えた秋月黒田家にとってただ一つの気懸りは、先代・長恵が二十一歳の若さで亡くなり、今また十六歳の領主・長堅が、病の床に就いたまま世継のない事だった。

古処山への千日の参禅を終えた若者は、雪の山道を飛ぶように駆けくだ降り、一刻足らずで上り口のある野鳥村まで降りてきた。

雪に埋もれた景色は同じだが、なんとなく里に近づいた暖かさが伝わり、何処からか聞こえてくる鳥の鳴き声に足を緩めた。

小川に沿った緩やかな里道を暫く下ると、土塀に囲まれた風雅な佇まいの屋敷が見えてきた。

屋敷へと懸かる板石の小橋を渡って冠木門を潜ると、老人が箒で玄関先の雪を掃いていた。

「爺、今戻った」

「おお、戻られましたか。ご苦労にござりました。千日の参禅のご無事を、月青院様にご報告なされませ。そうじゃ、湯も沸かしておりますで、先に湯屋に行かれませ」

「贅沢なことじゃが、このまま母上様の前に参るわけにいくまい。先に湯屋に参ろう」

「おお、そうなされませ。婆が腕に縒りをかけて正月の祝肴を用意しておりますでな」

足拵を解いて湯殿に行った若者は、頭からざぶんと湯をかぶり、

身体を念入りに洗うと湯に浸かった。
長い間雪に晒された全身の皮膚が一瞬硬直したが、しばらくすると心地よくほど解けて行くのが分かった。
これから、己が望むと望まざるとに拘らず、何かが起こっていくのであろうかと、複雑な思いを抱いたが、暖かな湯の中に至福のひと時を感じ、束の間の安寧を素直に享受することにした。
湯から上がり母屋に戻ると、先程婆と呼ばれた老女が迎え、若者を縁側に座らせて髪を結い直した。
「ご苦労に御座りましたな」
「爺(じい)と婆(ばあ)のお陰じゃ。しかしこの千日、確かに何かが成長したのであろうか。考えばかりがあれこれと巡る」
「また左様なことを申されて。何より逞しくなられ、また、直ぐに思い通りにならなくとも我慢するということを身に付けられましたことは、婆にはよーく分かりまするぞ」
「左様であろうか」
「ちょうどもう一年。月青院様が生きておいいでであればどのように…」
老婆は声を詰まらせ、両の目を潤ませた。
夏でもひっそりとしているこの辺りでは、遠くに炭焼小屋があるきりで、見渡す限りこの屋敷以外には人家もない。
低い土塀を巡らしたさして広くない敷地には、母屋とそれに続く湯殿、小さな離れが建ち、縁側からも見渡せる庭には見事な枝振りを見せる老梅が、雪の下にしっかりと蕾を付けていた。
土地の百姓や子供が『だんごあん』と呼ぶこの屋敷は、本当は『澤空庵(たんくうあん)』といい、凡そ十年前、若者の母であった月青院が、大宰府の観世音寺の戒檀院(かいだん)で戒(いまし)めを受けて結んだ庵であった。
そこに、ニ年程前、秋月黒田家の家老を二十余年の永きに渡り勤め上げ、破綻寸前だった財政を立て直し、中興の臣と云われる渡辺典膳(てんぜん)が隠居して、妻女の綾野(あやの)とともに移り住んで来た。
里の者は、まさかそのような身分にあった者とは思わず、優し

げで品の良い安主と、それに良く仕える正直な下僕の夫婦と思っていた。

三人は、まるで親子のように仲睦まじく暮らしていたが、一年程前に月青院が亡くなり、その後暫くして、この若者が一緒に住むようになった。

若者の名は新免右京之典興真（しんめんうきょうのすけおきまさ）といい、七歳の時より、秋月黒田家の家臣、新免九郎右衛門武政（くろううえもんたけまさ）の養子として育った。

しかし、新免家には別に嫡男がおり、後継ぎとして入った訳ではなかった。

新免家は「古御譜代（こおふだい）」と呼ばれる関が原以前からの黒田家譜代で、代々、馬廻（うままわり）二百五十石を給わる家柄であった。

当時、九郎右衛門は二人いる剣術指南の一人として、また、重役からの相談も預かる者として任じられていたが、嫡男の勇太郎に家督を譲り隠居した後、卒然と出家し宗弦と号して、城下から数里程離れた三奈木（みなぎ）村にある、臨済宗涼安（りょうあん）寺という、荒れ寺寸前の小さな寺の僧房に移り住んだ。

城下では、突然の九郎右衛門の隠居や出家とそれに続く領外への退出、また何故養子などを取ったのかなど、訝しい九郎衛門の行動を皆が噂しあったが、養子の出自が日田の掛屋（かけや）の縁者らしいということ意外は分からず、半年ほどで噂は立ち消えてしまった。

三奈木村は、秋月城下より東南へ二里余（約１０ｋｍ）、本家である福岡領下座郡（げざごおり）にあるが、郡（こおり）の北半分は秋月領で、残りの南半分の内、三奈木を中心とした一万二千余石を、藩祖長政の義兄弟として育ち、功により黒田姓を賜った加藤一茂が、三奈木黒田家として知行し、大部分の重臣が取り潰される中、大老職とともに代々受継いでいた。

そして、すぐその南は上座郡（じょうざごおり）で、さらにその南は「御料所（ごりょうしょ）」と呼ばれる幕府の直轄地である天領・日田と境を接していた。

右京之典は、秋月城下にある新免家の屋敷には住まず、出家した九郎右衛門とともに、この三奈木村の涼安寺に住んだ。

最初、十歳までの三年間は、四書五経などを始め一通りの学問と、正式なものではないが禅の修業をさせられた。
また、新免家には戦国の頃よりの実戦兵法（ひょうほう）が密かに伝わっていて、十歳を過ぎてからは剣術、体術、槍術、銃術、馬術の他、用兵の法なども含め、厳しい武術の稽古もさせられたが、数人を除いて家内（かない）にこれを知る者はなかった。
さらに三年ほど前からは、右京之典自らが発起して、古処山への千日の参禅修行が始まった。
そして、今日のこの日、千日目の参禅を終えたのであった。
典膳と妻の綾野は、右京之典が物心付いた時から、
―爺と呼びなされ―
―婆と呼びなされ―
と言っては本当の孫、いやそれ以上に、まるで僕（しもべ）のように世話を焼いてきた。
「婆、泣かずとも良いではないか。千日の修行が成就したのだ。母上様も笑顔でお喜び下さろう」
「それはそうでございますが、もし生きておいでならば、右京之典様のご成長をどのようにお喜びになられたことか…」
「ご報告して参るゆえ、後で一緒にな、正月を祝おうぞ」
髪を結い終えた若者は、綾野に優しく言うと離屋に行き、母の位牌に手を合わせ、千日修行成就の報告と仏の加護を願った。
母屋に戻ると、正月の祝肴の膳が用意され、典膳と秋野の他、三人の来客があった。
「おお、これは」
右京之典は慌てて廊下に座して平伏した。
「右京之典、ようやってのけた」
「右京之典殿、誠に祝着にござる」
「お師匠様、先生。お導きのお陰を持ちまして、右京之典、何とか誓願を全う致して御座います」
お師匠とは、出家して宗弦を名乗る新免九郎右衛門。また、先

生とは、筑前福岡の儒者にして医家である亀井南冥(なんめい)であった。
亀井南冥は先進の医家としてまた、徂徠(そらいは)派の学者として既に名声が高く、この年には、福岡黒田家が創設する学問所『甘棠館(かんとうかん)』の教授となる事が決まっていたが、秋月領主・長堅に度々講義を請われて、頻繁に秋月に下向した南冥は、ここ数年来の右京之典の学問の師でもあった。
「右京之典様、誠に御目出度うございます。お由布(ゆふ)様もさぞお喜びでございましょう」
「三郎右衛門(さぶろううえもん)様、有難うございます。偏(ひとえ)に皆様のお力添えのお陰にございまする」
今度は三郎右衛門に向かって、再び頭を下げた。
筑前の南端と境を接し、九州の天領十二万三千余石を差配する西国筋郡代が置かれる日田で、三郎右衛門は蝋、油商や掛屋などを手広く営む博多屋こと広瀬家の当主で、右京之典の亡くなった母、月青院こと由布の従兄妹であった。
秋月のある筑前南部から豊後にかけては、良質な蝋や油の産地であった。また、掛屋とは、江戸でいう両替商の如きものであり、日田のそれは、九州中の天領から日田に集る公金や上方からの資本を集めて、高利で諸方に貸し出し利鞘を稼ぐ金融業であった。
その莫大な資本は『日田金(ひたがね)』と呼ばれ、江戸開幕より百数十年、大小を問わず財政難に喘ぐ九州を中心とした諸大名家を始め商人、庄屋、百姓などにも貸し付けられ、次第に九州の金融経済の中心をな成していくのである。
この掛屋と日田金が、日田を日田たらしめる所以であって、今日の財政繁栄を築き上げた秋月黒田家を、家老職の典膳とともに外部から支えたのが、先先代の久兵衛(きゅうべえ)と先代・平八(へいはち)、そして当代の三郎右衛門であった。
幼い頃広瀬家で育った右京之典は、農産物を始め様々な商品や役務がどのように流通していくのかを肌で感じ、飢饉の折、飢えた百姓が日田に流れ、施しを求めて行列をなして彷徨(さまよ)う様なども見て

育った。今でも祖父母の墓は日田にあり、墓参に行き十日ばかり滞在すると、その都度経済の事など三郎右衛門から熱心に聴いた。
その三郎右衛門も目の端に涙を浮かべていた。
「早々、挨拶はその位にして、祝の膳を囲みましょうぞ。うちの婆が腕に縒(よ)りを掛けて肴を用意しましたでな」
「早々、杯を。この婆の酌ではご不満でございましょうが」
鑓り手の高級官僚から、今ではすっかり好々爺へ変わった典膳と綾乃の二人が言うと、
「おお、そうじゃ、そうじゃ。ご家老、忘れており申した」
「綾野様に酌をして頂き、何の不満がございましょうや」
「ほんに、ほんに、目出度い正月。涙はいりませぬでしたな」
三人がそれぞれ言い、六人が座に着いた。
膳の中身は、椎茸や薯蕷(やまいも)の入った鱠(なます)、木煉柿(ふゆがき)の寒天寄せ、川海苔(かわたけ)の酢の物、鯉の洗い、小鮑(こはや)と蕗(ふき)の甘露煮、栗と塩漬けの蕨(わらび)を戻したものを炊込んだ強飯(こわいい)、鶏と野菜の煮染(にしめ)、鯉の頭を味噌汁で煮込んだ鯉濃(こいこく)、山鱒(えのは)の焼物など、素朴だがどれも色取りどりの山の幸で、
「これはこれは。益軒先生も感心なされた、秋月の土産尽くしにございますな」
南冥が言うのに続いて、
「馳走じゃ」
「何と美味しそうな」
と皆も口々に揃えた。
典膳が殖産した秋月の特産品を使って、綾野がひと工夫もふた工夫も為した心づくしの料理が並び、さらに雑煮は、干椎茸とあごで取った出汁に醤油で味をつけ、将軍家にも献上される特産の葛でとろみを付けたものだった。
「ほう。これは長崎のあごでございますな？」
「さすが博多屋の主様。三郎右衛門様はようお分かりでございますな。甘木の町で求めた焼あごで出汁を取りました」
『あご』とは飛魚のことで、小振りなものを煮干や焼干にして、

保存を効かしたものだが、出汁を取るのにも用いる。
もともと肥前の長崎や平戸あたりのものであるが、九州の入口である小倉から長崎へ続く長崎街道と、そこから分かれて熊本へ続く肥後街道。それに筑前福岡の城下から天領・日田へ通じる日田街道が交差する甘木（あまぎ）町は、同じ夜須（やすごおり）郡にある秋月の城下から、西に一里半程ある日田往還沿いの拓けた門前町で、月に九度の市が立ち、近隣諸国から様々な物産と商人が集る一大交易地であった。
海産物も福岡や博多などから多く持ち込まれ、人々は遠く筑後、豊前、豊後からまでも求めに来たといい、貝原益軒も、
―凡博多より甘木の間、人馬の往来常に絶えず。東海道の外、此道のごとく人馬の往来多きはなしといへり―
と、『筑前国続風土記』の中でその繁盛振りを伝えている。
「山のものの椎茸と、海のもののあごの出汁がよう効いて、また、この葛のとろみが何とも言えずそれを包み込んで…」
皆も夢中になって雑煮を食べた。
食し終えて、ひと心地ついたところに、南冥が言った。
「綾野様、工夫なされましたな。この料理の仕方も添えて売れば、秋月特産の食材の良さを広く知らしめる事となり、また高く売れましょうぞ」
「おお、それは良い考えじゃ」
「早速、倅どもから物産方へ教えさせねば」
口々に言うのへ、
「先生、料理の仕方をまとめ、『食す』の字を取りて『筑前国食風土記』などど題し、本にして世に出したならば如何にござりましょうや」
右京之典の思いもかけない言葉に、南冥が唸って、
「貝原益軒先生の『筑前国続風土記』に掛けて、食とな？」
「はい、秋月のものだけでなく、秋月のものと合う諸国の物産をも広く探し、それを用いて秋月の品と組み合わせ、新しき料理を提案し得ればと。また、これは和紙など、食材となる土産の他の物に

ても出来得る事かと愚考致しました」
「うむ。食は、人の生きる根幹じゃが、江戸や上方などでは、歌舞音曲と同じく、料理屋なども、ひとつの贅を楽しむ為のものとなり、近頃富に栄えておってな」
南冥の話に皆も真剣になる。
「実はな、右京之典殿。わしも聞き齧(かじ)ったことじゃが、近年『料理秘密箱』なるものや、豆腐の料理ばかりを扱った『豆腐百珍』などという食に関する書物が沢山書かれておってな、これがまた江戸、上方なぞで大層な評判となっておるそうな。左様な繁華なる地でならば、料理屋の主や料理人だけでなく、諸侯や全国の大商人などの通人にも知られるところとなり、秋月の土産は諸国中に知れ渡ろう。右京之典殿、よう思われた。誠に良き考えじゃ」
皆も頷く。
「御公儀よりも「交易できる産品の増産に力を入れよ」と御達しが出ておるやに聞いておりました故、ただ想いついたままを述べただけにござりまするが」
そう師弟が問答するのへ、綾野がまた、
「ほんに、立派におなりになられました。月青院様が生きておいでならば、どのようにお喜びでござりましょうや―」
と言ってまた涙ぐむのを、右京之典が、
「婆。それは今日は言わぬ約束じゃぞ」
「左様ゞ、綾野様。正月でござれば、綾野様も少しお飲みなされ」
涙顔だった綾野も、九郎右衛門や皆に勧められて一杯だけ頂くと破顔した。
皆で、ひとしきり食風土記の案などを語り合いつつ、綾野の心づくしを堪能し、酒が行き渡り、何度も杯が交わされた。
ささやかながら、ニ刻ばかりの和やかな宴が終わり、八つ過ぎ(午後二時頃)。
寺へ帰る九郎右衛門と、甘木町の旅籠(はたご)へ泊まるという二人を城下の外れまで送りに出た右京之典に、九郎右衛門は、

「明日、待っておるぞ」
と言い残し、雪道を三奈木村へと帰っていった。

二章、円命流奥伝（前書き）

必ず一月の内に会得せよ。もし出来ぬ時は、仏門に入り、世との関わりを絶つものと心得よ一円命流の秘奥義を会得することを命ぜられ、弛まざる修行によって、無事に奥伝を許された右京之典。しかし、その隠し奥義には、天下を揺るがすほどの重大な使命を帯びた、秋月黒田家の秘事が込められていた

二章、円命流奥伝

ニ、円命流奥伝

翌朝、右京之典は未だ明け切らぬ雪の残る野道を田代(たしろ)村へと向かった。

野鳥村の澤空庵(たんくう)を未明に発ち、城下を東西に抜けて南に折れ、山見川に沿った土手道を上流へと上り、凡そニ里半（約十ｋｍ）の道程(みちのり)を僅か一刻（約二時間）足らずで田代村まで歩くと、左手の小高い山の端(は)に、こんもりとした杜に囲まれた社が見えてきた。

その麓の田代明神と刻まれた鳥居の前に着いたとき、ちょうど明け六つを告げる時鐘が遠くから届いてきた。

大きく息を吸い込んだ右京之典は、二百段は有ろうかという、両側を杉の大木に挟まれて遥か上方まで続いた薄暗い石段を一息に駆け上がり、ひとつ目の鐘の音の響きが消えぬ内に、息も切らせずに登り切った。

「参ったか」

小ぢんまりとした社殿の前に立つ九郎右衛門の前に、右京之典は片膝をついた。

「お師匠様、お早うございます」

「本日よりひと月、秋月円明流奥義を相伝致す。必ず一月の内に会得せよ。もし出来ぬ時は、仏門に入り、世との関わりを絶つものと心得よ」

「はい」

「では、参れ」

社殿の裏手から、奥へと入っていく九郎右衛門に右京之典も続いた。

身の丈程もある枯れ薄の間を四半刻も登って行くと、六間程の円(まる)い平地(ひらち)が開けた。

そこは北側にある見上げるような二本の楠の大木に遮られた所(せ)為(い)で、この大雪にも関わらず薄っすらとしか雪が積もっていなかった。

奥に目を移すと、三尺四方の小さな祠(ほこら)と、その向こうに苔むしたような墓石とも思われる岩が、枯草の中、転がるように幾つも並んでいた。

「切支丹の隠れ墓じゃ。どれかは分からぬが秋月新免家の祖、無ニ之助(むにのすけ)の墓もある」

右京之典が初めて知る場所であった。

「右京之典。秋月新免家の祖、新免無ニ之助一真(かずまさ)は戦国の世、筑前黒田家の祖・長政公の御尊父・孝高(よしたか)公が、太閤殿下の臣として中国（山陰・山陽地方のこと）に在りし頃より仕え、常に共に戦って来た仲であった」

「ご本家大老、加藤家の祖にして、三奈木黒田家を立てられた一(かず)成(なり)公のお父上ともども、囚われた孝高公をお救い申した事もあった」

「黒田家が筑前に入部する前、何処におったか知っておるな？」

「はい。豊前かと」

「そうじゃ。豊前は古くより切支丹の地でな、太閤による九州平定の後も、豊前を始め九州各国はキリシタンの国であった。豊前に入部された孝高公はキリシタンに帰依(きえ)され、弟・直之公、一成公も、また無二之助も、そして多くの家臣もそれに続いた」

「後に、秀吉公から棄教の命が下った為に孝高公は従われたが、徳川家の世になっても直之公を秋月、一成公を三奈木など、主な家臣を筑前の南部に配され、切支丹への信心を続けさせられた。その時に、直之公に与力として付けられたのが無二之助一真じゃ」

「その頃、この辺り一体には沢山の切支丹寺があり栄えたというが、寛永の頃（一六三七）に島原の乱が起こり、それに切支丹信徒が加わっておったということで、役後にご公儀は禁教令を厳しく改められた。誠はあまりの圧政に対する領民の一揆であったのじゃがな、この地でも大慌てで切支丹寺や切支丹墓を遺棄し、皆棄教した

のじゃ」
「よって、城下の寺々にはそれ以後に建てられた墓があるが、家祖、長興公以下、真の先祖の墓はこのような荒地に、石ころが転がっておるだけなのじゃ」
「左様なことが…」
「無ニ之助一真は黒田家中に当理流兵法を指南し、特に十手術に秀でておった」
「十手術とはどのような？」
「十手術だけは、そなたにも教えておらなんだな」
「左手に鉤のついたニ尺程の鉄の棒を持ち、右手に小鑓や薙刀、野太刀を持つ。左で受け、引き倒し、右では薙ぎ、突き、叩く。組討になれば左手の得物で締め上げ、掻き斬る戦場での実戦の術じゃ」
「もしやそれが秋月円明流の内の二刀太刀の技の基でございますか？」
「その通りじゃ。だが、それまで戦場ばかりが舞台であった無ニ之助が、あるとき足利将軍の剣術指南、吉岡某と立合う機会があったそうじゃ。その頃既に京を追われた将軍家の指南如き何程の物ぞ、と自身満々に仕合うてみたが、なんと小太刀の相手に三本の内一本を取られてしもうた」
「小太刀に、でございますか？」
「左様、吉岡某は代々、足利将軍の指南を務める吉岡流の兵法者であったそうな。仕合うた後、太刀に対し不利と思われる小太刀で何故に一本取られたのかどうしても納得がゆかず、無ニ之助は尋ねたそうじゃ。すると、『合戦ばかりが戦いの場となるわけではない。当流は古より伝わる京八流の一つ。もともと小太刀術は屋敷内で不意に襲われた時に遣う公家の秘術じゃ』と」
「戦場の刀法とは違うということでございますか？」
「いかにも。甲冑を着る介者剣術に対し素肌剣術ということじゃ。屋内では鑓は振り回せぬ。また、もみ合えば短剣が便利じゃ。また離れた場合は投げ打たねば意味は無い。やがて戦いの世が終わり徳

川の御世となり、武器の携行が厳しく禁ぜられ、殿中にては脇差のみ、往来でも大太刀、ましてや弓鑓を持ち歩く事は出来なくなった。武士が携えるは大小二本の刀のみとし、今の刀の長さが定められたのじゃ」

「そのような事で刀の定寸というものが定まったので御座いますな」

「そうじゃ。斯様な刀で戦が出来よう筈もないわえ。そこで、戦場往来の豪胆な当理流兵法を平時にも備うることが出来る武術として練り直したものが秋月円明流じゃ。そして、平時に用うる『刀』を以って、治世に遣う刀術が円命流隠し奥義じゃ」

「二刀を使われ、剣聖とも云われる宮本武蔵様は円明流と関わりがあるやに聞いておりますが」

「大太刀、小太刀を使う二刀の術は当理流十手術に、豊後で見た切支丹伴天連のニ刀の術を取り入れて無ニ之助が創案したものじゃ。武蔵玄信も、もとは新免の一族の者であり、無ニ之助の弟子の一人であった。武蔵玄信はニ刀の技を究めんとしたというが、功名心ばかりが人一倍強く、戦いの不要な太平の世へと移り行く中、左様な大げさな剣法を遣う場も見せる場も次第に無くなり、外に名声を求めて出奔したのじゃ。本人が仕合うたと云われる数も、云伝えの半分も無いであろう」

「左様に御座りましたか」

「円明流は他家にも伝わっておるが、その隠された真の奥義を相伝するは秋月円命流のみ。秋月円命流は殺人剣に非ず。黒田家、そしてこの太平の世を守る為にのみ遣うを許される。良いな」

「はい」

「秋月円命流奥義、一刀太刀法二十手、二刀太刀法六手、居合法十四手、小太刀法五手、短剣法五手、手裏剣法四手。この内、秘奥義が隠されておるのは小太刀まで、見せるのは一度限りじゃ。よいな、心して見よ！」

そう言い放つと、宗玄こと新免九郎右衛門は円い平地の真中に、両

足を軽く開いて静かに立つと、両の目が閉じられ、時折風花が舞うだけの静謐（せいひつ）な刻（とき）が辺りを包み込んだ。
と、その腰間から水が流れ出るように、ひとつの無駄も無い動きで剣が抜かれ、
「一刀太刀、水月」
「流水」
「深谷」
「稲妻」
右京之典は目を見張った。それは初めて見る不思議な剣であった。
音も無く縦横に剣が振るわれ、森閑とした冷気が両断されてゆく。
しかし、ちらちらと降る雪は・・そよとも乱されることなく、何事もなかったかのように地上に舞い落ちてゆく。
その動きは、まるで能の達人が舞を舞うかのようで、右京之典は声も無くその動きをただ見詰めていた。
凡そ四半刻（三十分）。
一刀、二刀、居合と、右京之典は瞬きをするのさえ忘れたように見入った。
そしていつしか小太刀の技に移り、
「風車」
「短長…」
小太刀法5手目、「深胴」を終えると、最後に九郎右衛門は血振りの型を終え、脇差を静かに鞘に納めた。
「見たか？これが真の円命流じゃ」
「はい…」
右京之典は継ぐ言葉も無く頷いた。
「そなたには既に並みの者では適わぬ。これが戦場なら、何ら恐れる事は無い。馬を駆り、鉄砲を撃ち掛け、鑓を操り、当に一騎当千じゃ。しかし、平時の相手は顔が見ゆる。事情が分かる。直前ま

で信じておった友かも、契った女子かも知れぬし、幼い子供を誑(たぶら)かしてのことかも知れぬ」
「これから私は、そのような戦いを為して行かねばならぬのですか？」
しばし間を置いて、九郎右衛門はゆっくりと口を開いた。
「分からぬ。しかし、そなたの定めを想えば、恐らく…、な」
「しかし右京之典。このような『型』で闘いに勝てる訳ではない。円命流はそもそも、馬術、体術、銃術の外、戦場の乱戦を勝ち抜く為の全ての技と策を纏めた兵法じゃ。しかし先程も言うたが、平時の戦いは決して力だけでは勝てぬ。普段の政事や様々な術を以っての縛(いまし)めに対して、如何に抗してゆくか。然して、一旦剣を以っての闘いになれば明鏡止水。惑う事無き鏡の如くに心を研ぎ澄まし、そしてその無の心にて剣を遣わねばならぬ」
「無の心で剣を…」
「そうじゃ。真の敵、正邪を見抜く心剣じゃ。」
「心で遣う瞑想の剣でございますか？」
「その通りじゃ。邪な心を抱いて向かって来るなれば、たとえ美しき女性(にょしょう)の白き肌でも躊躇(ちゅうちょ)無く斬り裂かねばならぬこともあるやもしれぬ。それが、秋月円命流と右京之典、そなたに課せられた使命じゃ。ひと月の後、検分いたす。よいか？」
「畏まりましてございまする」
そう言い置いて去りゆく九郎右衛門を見送りながら、果たして自分に出来るのだろうかと、先程の師の動きを思い返していた。

翌日から、奥義会得の為の孤独な修練が始まった。
夜明けから日暮れまで、田代村の明神社の裏手から通じる切支丹墓の前の平地に座して瞑想し、九郎右衛門の動きを頭の中で何度も繰り返しなぞってみたが、一見軽やかに見える微風(そよかぜ)のような太刀捌きの内には決然とした豪壮な力が秘められ、舞の様に緩やかに振るわれたのに、その刃先から逃れることは至難の技と思えた。

それは正(まさ)しく、邪(よこしま)なもの寄せ付けない凛とした聖者の剣であった。

右京之典は毎日、半刻。長い時は一刻余りの瞑想の後、立ち上がっては剣を振るう事を繰り返した。

しかし何度繰り返しても、それは何処かぎくしゃくとしていて、師の見せてくれた「奥義」とは程遠いものであった。

師は、一度だけその奥義を見せ、

―決して力ではない。何者にも惑わされぬ無の心じゃ―

と言った。

三日目から右京之典は、明神社の境内の外れに建つみすぼらしい小屋に泊り込み、未明に起き出しては、まだ冷たい風が吹き抜ける社殿で結跏趺坐(けっかふざ)すること一刻。自ら炊いた塩粥で朝餉を終えるとまた、休みもせず瞑想と剣を振るう事を続けた。

それは、日暮れてもなお、五つ（午後八時頃）の鐘が打たれる頃まで続けられ、再び社殿で半刻ばかり座禅を組んだ後、刀の手入れを終えてからやっと寝に就く。毎日を一人きり、自らに向き合う事こそが必須の事ではないかと考え、己に課したのだ。

二十日をニ、三日過ぎた辺りから、ようやく最初のもやもやとした雑念が次第に消えてゆくのが感じられた。

そして二十八日目の今日。

午前の座禅と昼餉を終え、久しぶりに穏やかな晩冬の陽が射込む平地の真中に座し、瞑想する事一刻。

右京之典は、膝上の銘刀「信国重包(のぶくにしげかね)」を掴むと、眸を閉じたまま静かに立ち上がり、脇差の横に差し添えると、柄に手を掛けゆっくりと抜き放った。

筑紫住源信国は、黒田長政が筑前入封の際引き連れて来た黒田家御留(とめ)鍛冶で、十五代重包は享保六年（一六二二）、武芸を奨励した八代将軍吉宗が行った「全国鍛冶御改(おあらため)」にて葵一つ葉紋を彫る事が許された刀工四人の内の一人であり、重包は信国一門では珍しく、相州伝の堂々たる豪快な刀を打った。

刃長二尺三寸一分。同じ重包の脇差と共に、九郎右衛門から譲り受けた厚重ねの豪壮な刀身が振るわれた。
「秋月円命流奥義。一刀太刀、水月」
刹那。さして大声でもないその声に驚いた番の目白が、楠の枯れた一葉を落として慌てて飛び去って行った。
太刀が左から右に水平に回された時、そのひらひらと舞い降りる枯葉が偶然にも刃先に触れ、音も無く両断された。
両断された葉は二つに分かれてもなお、その軌跡を変えることなくゆっくりと地面に落ちていった。
まるで緩やかな舞に似て、その動きは「動」の中に「静」を想わせ泰然自若。無意識に振るわれるその剣は正しく「静」の内に「動」を感じさせ、幽玄であった。
最後の『小太刀、抜胴』を終え、血振り納刀の後、刀身を鞘に納めると静かに息を吐いた。
（なんとか出来た！）
―しかし、まだ何時でもこうは参るまい―
そう想ったが、やはり一つの頂きに到達したようで、その喜びと自信は右京之典の内に、大いなる勇気が湧いてくるのを感じさせた。

翌々日、平地の真中に瞑想する右京之典は気配を感じると、ゆっくりと立ち上がり、振り向いて片膝を着いた。
「秋月円命流秘奥義。ご検分下さりませ」
「うむ」
凡そ四半刻（三十分）。右京之典は、一刀太刀、二刀太刀、居合、小太刀の隠し奥義全ての型を遣い終え、再び片膝を着いた。
「終えましてございます」
「右京之典。見事じゃ」
「お教えによりまして」
「秋月円命流。奥伝許し遣わす」

「ははっ。有難き幸せに存じまする」
九郎右衛門は懐から小さな巻物を取り出すと、右右京之典に向けて胸前で広げた。その巻頭には、「秋月円命流奥伝之書」と大書されており、続いて秋月円命流奥義、一刀太刀法二十手、二刀太刀法六手、居合法十四手、小太刀法五手、短剣法五手、手裏剣法四手に付いての解説が書かれてあった。そして最後に雄渾にも書かれた三行を声にした。

―以一剣祓禍神（いっけんをもってかしんをはらい）
―以ニ剣佑天下成平《にけんもってててんかをたいらかになすをたすく》
―以此合心剣為聖剣門《これをもってしんけんにあわせせいけんのもんとなす》―

「技にても力にても、ましてや伝書にても無し。今一度言う、その心にて剣を遣うのじゃ」
「はいっ」
「剣は人を斬るが為にあるは自明。されど、秋月円命流は殺人剣（せつじん）に非ず。この意よくよく噛締め、御役目努々（ゆめゆめ）疎かに致すべからず」
「ははっ。神明に誓いまして」
「うむ。秋月円命流奥伝、見るべき者無ければ伝うる事能（あた）わず。また、他の芸にて御役目為さしむ事適（かな）わば承（うけたまわ）るに能わず。子々孫々迄相伝致すも、そなた一人（いちにん）のみのて途絶ゆるも構わず」
そう言うと、九郎右衛門は平地の奥にある祠の裏側まで行き、三段程積まれた石垣の前にしゃがみ込み、小柄（こづか）を抜いて石垣の隙間に差し入れて真中辺りの石を慎重に一つだけ外した。
石垣の真中にぽっかりと開いた穴の奥は空洞になっているらしく、九郎右衛門はその穴に手を突っ込んで中にあるものを確かめると、幾重にも油紙に包れた四角い箱のような物を取り出した。
包みを解かれた物をよく見ると、それは所々青錆びが浮いた銅

造りの銭箱であった。
懐から鍵を取り出して、掛けられた錠前を外して蓋を開けると、もう一つ木箱がぴったりと入っており、さらにその蓋を開けると、中には油紙にしっかりとくるまれた書状らしき包みが二つ収められていた。
二つの紙包みを取り出して、銭箱を穴に戻し、石垣を元通りにすると、訝しく見詰める右京之典の傍まで戻って来た。
「今宵、庵に戻りて、目を通して置くのじゃ。中に書付が入っておる。誰にも見せてはならぬ。また、決して肌身より離してもならぬ」
厳しく言って、二つの包みを渡した。
「南冥殿も下向されておる。明日は日田より三郎右衛門殿も御出でじゃ。明日宵五つ（午後八時頃）、古心寺まで参れ。今の事、忘れてはならぬ」
「はい。心得ましてございます」
右京之典は、平地の端に置いた小さな荷を背に負うと、九郎右衛門とともに石段を降っていった。九郎右衛門は、別れ際、
「これよりは何時にても旅立てる様、常に仕度を致しておくのじゃ」
と些か不可解な事を言った。

新たに月が立ち閏（うるう）一月となった翌朔（ついたち）日。
夕暮れてもなお半刻程、離れで一日中仏壇に向かっていた右京之典は、昨日九郎右衛門より受け取った書状を懐に入れると立ち上がり、両刀を手挟んだ。
母屋に戻り綾野に外出を告げると、典膳は後任の家老、田代半太夫の屋敷に出掛けているとの事であった。
草鞋を付け、何時もの小袖のみで出掛けようとするのへ、
「今日は寒が戻ってよう冷えますれば、これを羽織って行かれませ」

と言って、背中から羽織を着せ掛けてくれた。先程縫い上がったばかりだと言う。
それはこの数ヶ月、綾野が自ら紡ぎ、近在の百姓の女房に教わりながら織り上げた生地で仕立てた袷の道中羽織であった。
「婆、何時このような物を」
「ちゃんと小袖も、袴も揃えてございまするぞ」
と胸を張った。
「立派なものじゃ。遠慮のう着せて貰おうぞ」
素直に喜んで礼を言う右京之典に、
「気を付けてお行きなされ」
と言って送り出した。
暦の上では春といえども「衣更着（きさらぎ）」とも謂われる如月（きさらぎ）二月を控え（天明四年は閏一月有）、風は無いが寒が戻り、澤空庵から城下へと向かう野道は深とした冷気に包まれていた。
道すがら、書付に書かれてあった内容と、何故その様な大事な物が自分に託されたのかを想い返していた。
九朗右衛門から渡された書付の内、まずひとつ目は大変に古いもので、

―慶長五年九月十九日大戦にて東軍勝利並に天下平均の儀、
誠に筑前守殿の御忠功御味方第一等の故と存じ候事一時にても忘じ候事之無く、
御料地御子孫永く疎略の儀之在る間敷く候事約定致し候―

と冒頭にあり、関ヶ原直後、戦に勝利できたのは黒田長政のお陰であると、その軍功を誉め称え、徳川家康が手を取って感謝の言葉を述べたとの言い伝えを証明する内容であった。
続いて、

―今太平天下永世の事計るに、栄華を極めし豊家（ほうけ）が如く世子定

ら不りて家絶ゆる事甚だ多くして、愚と云え供長子優先致し、外に優る庶子を別けて家を興させ補佐致す可候
万一、嫡流途絶たりし折には之より新に嫡流立つる可相図りて決す可候
若し永きに亘り図る事能わず定ら不れば筑前守殿御定め在る可く御役目申付者也
又、筑前守殿にても其御役目末永く相伝得(あいつたうる)る可、家を分け御子孫にて後々迄御役目相勤(あいつとむるべき)可者也
尚、岡本正宗短刀一振与え証左と為す者也
慶長十四（一六〇九）年三月四日
黒田筑前守殿
前内大臣(さきのないだいじん)　源家康　―

と、立派な花押までであった。
〔慶長五年九月十九日大戦〕とは、言うまでも無く関が原の戦いのことであり、永きに渡る年月と、大きな犠牲を払って成し遂げた、その天下の太平を永続させんが為の影の役目を、家康は黒田長政、そして黒田家に託したとする誠に重大な内容であった。
さらに元和元年（一六一五）九月九日付けの裏書がなされ、その内容は大凡次のようなものであった。
―家康の九男・義直(よしなお)を尾張、十男・頼宣(よりのぶ)を駿府に配してそれぞれ一家を興させ、宗家である将軍家と三家体制にする事。
黒田家でも長子忠之に宗家を相続させるが、長興、高政を分家させ三家とする事。
そして将軍家に世継問題が起こり、政事に空白が生じるようであれば、黒田家が采配する事。
また平世は役目を秘し、それを代々然るべき者が負うべき事。―
など、将軍位を秀忠に譲り大御所として駿府にあった頃の徳川家康と、筑前黒田家の始祖・長政が太平の世を存続させる為に、二人で様々に謀った事が記されていた。

徳川幕府の政治に、黒田家がこれほど大きく、そして深く関わっていたことは、右京之典にとって、誠に驚くべき事であった。
そして、今ひとつの書付は、なんと八代将軍であった徳川吉宗から、秋月黒田家四代・黒田長貞に宛てた書状で、

―八代就位候儀、柳営幕臣朝臣乱騒の兆候在りし折、誠に甲斐守殿の御忠節を以って平なるを保ち、甚だ有難く奉謝致し折候、末まで努々疎かに此れおもう事無く候…―

と、八代将軍の座を巡って幕閣直参、諸侯、朝廷迄分かれて紛糾し、争いが起きようとしたが、八代位に就けた事は三代・長軌殿のお陰であると始まり、以下は凡そ次のような内容であった。
―三代長軌公のお陰で将軍位に就けた事と神君家康公よりの御役目を今後共万一に備え謹んで継承して欲しいこと。
先代・長軌殿より提起のあった、現三家も血筋が遠くなった為に、将来新たに血筋の近いニ家を設けて継嫡問題を防止する案を実施する積りである事。
今後万一、改めて継嫡問題が起きた場合も采配の御役目を役立てて欲しい事…―

などなどが記されていたが、最後には更に驚くべきことが書かれていた。

―宝永七年の先〃代・甲斐守殿並びに正徳五年に先代・隠岐守殿急逝されしは、尾張が謀りたる事判明致し候。無念也。営中にても尾張が謀りし諜者居りし由判明致し候、御当家にても御気を附けられ度申送り候、向後尾張殿如何なる所以にても将軍位に就く事能わず…云々
享保元年六月…　―

これは吉宗の八代将軍就位が決定した直後で、それまで五代綱吉が身罷(みまか)って後、六代・家宣、七代・家継と将軍の存命が短く、僅か十年足らずの間に代替わりが三回も続いた上、何れも世継問題が拗れて政情不安が続いていた時代であった。

―暗殺―

幕府の重職である奏者番(そうじゃばん)をも勤め、甲斐守に任ぜられていた秋月黒田家の二代・長重が、六代家宣就位の翌年、宝永七年（一七一〇）に、鹿狩りの後急死した事と、正徳五年（一七一五）、三代・隠岐守長軌が在位僅か五年足らずで、江戸上屋敷にて没した事は暗殺であり、将軍継承問題に絡んだ尾張家の謀略だと言うのだ。

昼間、あまりに天気が良かった所為か、日が落ちてからの急な冷え込みに道の端には既に霜が降りかけていたが、事の重大さに右京之典には寒さを感じる余裕など無く、星明かりの野道を足早に降ると、城下の手前で、町中を東西に貫いて豊前小倉から肥後へと至る秋月街道へと入った。

野鳥川に懸かる橋を渡り城下に足を踏み入れ、鉤(かぎ)の手を幾つか折れて城下の中ほどまで来た時、遠くで犬の遠吠えが起こり、右京之典の左側の武家地から右側の町屋へと移動していった。

高札場である札の辻から右へ折れてニ、三町も行けば古心寺へ続く石段が見えてくる筈だが、春まだ浅く、宵五つ（午後八時）ともなれば表を行く人も絶えて、無月の深い闇が城下を包んでいた。

北へ転じて穂波郡(ほなみごおり)へ抜ける『白坂道(しろさかみち)』となった緩い上り坂を登って浄覚寺(じょうかくじ)の門前を過ぎると、右手に古心寺の細い石段が現れ、数間置きに立つ燈篭(とうろう)に灯りが入り、山門へと続いていた。

二章、円命流奥伝（後書き）

難しい話が続きますが、次章はいよいよ殺陣シーンも。【これは歴史小説でなく『時代小説』です。時代考証や史実・風俗等、なるべく忠実にと調査・研究した上でとは考えていますが、あくまで『フィクション』です。今後、文章中の表現に現代では受け入れられない表現等が出てくる場合もあるかもしれませんが、その時代をより的確にあらわす為のみであり他意はありません】（２００４．冬頃に文庫相当４００ページくらい執筆していたものを再チェックしながらアップしています）

三章、秋月黒田家秘聞

臨済宗・興雲山古心寺は正保四年（一六四七）。家祖長興が父・長政の菩提寺として建立したもので、開山は京の大徳寺の第一五六世の住持であった江月宗玩、初代住職は同じく一八一世住持・江雪宗立。以来百三十余年、秋月黒田家累代が眠る。

近くで再び犬の遠吠えがしたが、右京之典が今来た方角へ移動しながら次第に消えて行った。石段を登り山門を潜ると、本堂の前に十一、ニ才の小坊主が待っていた。

「新免右京之典様にございますか」

「左様に御座る」

「御案内致します。どうぞこちらへ」

案内の小坊主に続いて、右京之典は本堂の左手の風雅な檜皮葺の屋根を持つ庭木戸を潜った。

（此の様な所があったとは…）

築山が築かれ白砂が敷かれた所々に、灯りの入った石燈篭の配された庭には、馥郁とした梅の香が漂っていた。

飛び石を伝い、紅白の花が咲き乱れる奥の梅林を通り抜けると、その先には一際高い、白い練塀に囲まれて、扉を閉ざした屋根門に隔てられた一画があった。

「こちらに御座います」

そう言うと、小坊主は会釈して戻っていった。

扉を押し開いて中へ入ると、もともとの静寂が一層静まり返ったような門内には篝火が焚かれ、左手には小ぢんまりとした竹林を背にした白壁に沿って立派な墓塔が立ち並び、奥には小さな墓石や卒塔婆が幾つも立っていた。

そして右手に敷かれた莫蓙の上に、九郎衛門、典膳、南冥、そして三郎右衛門の四人の外に、右京之典の見知らぬ立派な武家が二人座し、さらにその後ろに従者らしい武士が控えていた。

二人の従者が門番を為すためか、急いで走り去って行くと、九郎右衛門が口を開いた。
「待って居ったぞ。ここは初めてであったな」
「はい」
九郎右衛門の問いに、右京之典は腰から抜いた太刀を右手に持替え、片膝を付いて答えた。
「長興公以来の秋月家累代の墓所じゃ。先ずは其の床几に掛けよ」
九郎右衛門は、墓塔を背にして自分達と向かい合うように置かれた床几を指した。
「先日の書付は読んだか」
「はい。読みまして御座います」
「内容は解ったな」
「はい。一通りは」
「では、これへ」
右京之典は懐から油紙に包まれた二通の書状を出すと、九郎右衛門に渡した。
「ご検分を」
そう言って、右京之典の見知らぬ武家に渡した。
「御本家御老職、黒田美作様と当家御家老、田代半太夫様じゃ」
右京之典が慌てて床几を外し平伏しようとするのへ九郎右衛門が、
「そのままでよい」
と制した。
「しかし」
「よいのじゃ」
二人は二通の書付を交互に見終わると、
「まさに、我が家にて当主のみに口伝されてきた通りの事が書かれて居る。間違い無し」
そう言い合いながら今度は書付を南冥に渡した。
南冥は二つの書付を膝の前に広げて、懐から取り出した別の書状と暫く見比べていたが、書付を元に戻して再び膝前に置きながら、

「東照神君の御判物、八代様の書状。二つとも間違い無き物と存じまする」
と言った。
今度は典膳が口を開いた、
「南冥殿。ではそなたから話をしてくだされ」
「畏まりました」
九郎右衛門の言葉に南冥が答えた。
「この一年。福岡、秋月、両黒田家の御家老様のお許しを頂き、両家の書庫、御家中の主だった方々や黒田家所縁の寺社の古文書など、また三郎右衛門殿のお力をお借り致し、我が亡師、永富独嘯庵門下の学者、孫弟子など、御公儀にも厚く取り立てられたる諸氏にも合力を求め、ここに居らるる皆様方の話と一つに繋ぐる事が相成りまして御座ります」
右京之典は何の話が始まるのか見当も付かなかった。
「皆様ご存知の事が大いに含まれて居りまするが、何卒お聞き下され」
そう言い置いて、話を始めた。
「関ヶ原の戦勝にて東照神君家康公が興雲院様、即ち御生前の長政公のお働きを一番のものとしてお認めになられ、以来頼りになされて様々に天下泰平の策を共に練られたる事は、これらの書付にて御承知のとおりに御座ります。もともとその頃、譜代、外様などというものによる区別は無かった由に御座ればこの儀宜なるかなと存じまする。先ず書付にある慶長十四年（一六〇九）三月四日を調べて見ましたる処、後に御三家の一、紀伊徳川家の祖となられた家康様御十男・頼宣様が、その所領を譲り受けられた祝いとて能を披露なされ、駿府城に呼ばれし長政公が、家康様と会見なされた日に御座りました」
皆、寂として声も無く聴いている。
「御晩年の家康様が一番可愛がり育てられたる頼宣様をして、お二人で三家の構想を抱かれたと想われまする。そして裏書の元和元

年（一六一五）九月九日とは大坂夏の陣の後、御当家の祖である東陽院様、即ちご幼少の長興公が将軍家に御目見得が適った後、長政公が家康様の居わす駿府城にお連れ遊ばした日に御座りました。長興公のご聡明さを見て取られた家康様とともに、黒田家の分家についても話合われ、家康様が大坂の役を鎮められた翌年に薨去なされた後も、長政公がお亡くなりになる直前まで、徳川の三家を確立せんと、その御遺志を全うすべく奔走なされた数々の痕跡が見つかりまして御座ります」

本家家老の黒田美作が尋ねた。

「それで廃嫡までお考えになった二代目忠之公に、敢えて宗家を継がされたか」

「左様に御座りまする。それで、この東照神君よりの書付と共に自らの差料であった名物・城井兼光（きいかねみつ）を長興公にお与えになり、別家を立て御役目を引き継ぐよう御遺言遊ばしたので御座りまする」

「成程。合点が行く」

「よって、何としても長興公は将軍家に御目見得なさらなければならぬ訳があり、また黒田家内の、それも遠国外様・無城の僅か五万石の分家に、将軍家よりの城主格を認める御朱印がわざわざ降し置かれたのは、これが為で御座りまする。御本家二代・忠之公の御代に起きた黒田騒動の際にも、将軍家は筑前国主の座を召し上げ、長興公に差配するよう内々お話があったものを、将来の将軍家継嗣問題において悪しき前例と成らぬようにと、当時の御本家老臣、栗山大善殿と相談なされ、ご辞退遊ばしたので御座りまする」

南冥が答え、再び話を続けた。

「将軍家に最初の継嗣問題が起きたのは四代家継公に嗣子無くして薨去遊ばし、館林より綱吉公を五代様としてお迎えせんとした時に御座りました。御大老・酒井忠清様と御老中・堀田正俊様の間で拗れかけた時に御当家二代・長重公がこの御役目により、堀田様の案を推されたので御座りまする。この恩に報いようと綱吉公は長重公を御公儀の重職である奏者番（そうじゃばん）にお就けになられましたが、忠之公

御存命中は遠慮なされておられました」
「何故、当家の様な外様分家の小領主に、柳営（江戸城内・幕府）栄達の登竜門たる御役職が任ぜられたか、長らく不思議に想うておったが、これで氷解致した」
そう漏らしたのは田代半太夫であった。
「綱吉公の世子、徳松君がお亡くなり遊ばすと、再び継嗣問題が出来致しましたが、最終的にはこれもまた内々の長重公の御裁可にて、甲府から綱豊公が御養子に入られ、後に六代家宣様となられました。綱吉公御就位に関しましては、後に御大老となられた堀田正俊様が暗殺されておりまする。しかし六代様の御代も、ご病気の為数年で終わり、世子の家継公は将軍宣下をお受けになられた時僅か四才。当然のことながら、継嗣問題は再燃致しました。聡明の誉れ高い家継公で在らせられましたが、危惧通り八歳にて身罷られましたるは周知の事」
「当家の二代に亘る主を弑したのは誰じゃ。密かなる御役目を誰かが漏れ知ったか」
秋月黒田家の老職を典膳より引き継いで預かる田代半太夫が尋ねた。
「八代様のお手紙に拠れば、二代、長重公は尾張家の吉通（よしみち）公かそれに繋がる者。三代長軌公は吉通公の後を継がれた尾張継友公かそれに繋がる者と推察されまする。ただ、尾張の吉通公も血を吐いての急死であったとの話もありまする。八代の座を巡っては、世子未定のまま二代将軍秀忠公以来の嫡流が途絶え、大いに紛糾致し、先代が亡くなられて尚数ヶ月の空隙が生じて御座りまする。長軌公はこの前年に江戸屋敷にて急逝なされましたが、この事を予見なされたか、吉宗公を将軍後見役に就けんと思し召され、密かに根回しをなされていた由、御遺言を四代となられる長貞公と、時の江戸家老、典膳様の御尊父・吉行様に託されて御座りまする。その一年後、吉宗公の将軍位が定まって後、吉宗公よりこの書状が届いた由に御座りまする。この後は、典膳様に」

ここまで一気に喋った南冥の言葉を受け、典膳が話を始めた。
「愚父が病にて身罷る直前、江戸家老の職を継いだばかりの某を、密かに枕元に呼び申したのは、確か九代将軍位に家重公がお就きになられた延享元年（一七四四年）で御座った。その時父は、正徳四年（一七一四）の三代長軌公急死は毒殺によるものであると某に断言し申した」
核心に近づいて来た話の内容に、皆が緊張した。
「そして、長軌公の後を継がれた四代長貞公に、国表より至急呼び寄せた新免右兵衛（うひょうえ）殿。九郎右衛門殿の祖父上で御座るが、右兵衛殿と弟御、平六殿を警衛に就けた由。その時は誰の手に拠るものか判然と致さなかったが、一年後、八代様より密書が降って、然も在らんと想ったそうで御座る。それより二十有余年、尾張徳川家七代宗治公が謹慎の沙汰を受けるまで、刺客に襲われし事数度と言わず。その時の傷が元で、弟御の平六殿は命を落とされた」
風でも出てきたのか、立ち並ぶ墓塔の後ろ、白い練塀の背後の竹林の笹の葉が少しざわめいた。直後、「がさがさっ」という音がして、枯れ枝を踏み折る音がした。
その音に皆が身構えたが直ぐに、
―ぶひっ―
という小さな声に緊張を解いた。
「今年は寒さの所為か、猪が時折、里近くまで降りて来申す」
九郎右衛門が苦笑しながら言った。
「お続け下され」
「然らば」
典膳が答えた。
「実は、長軌公が急逝なされた後、年が明けて正徳五年（一七一五）となった年の初め。御正室・養真院様の御懐妊が判明致し、殿の菩提を国許で出家して弔う為として、江戸家老であった愚父・吉行は、某の母である妻のあやめをお付けし、平六殿と老女の四人と僅かな供回りのみでひっそりと国表にお連れ申したので御座る。享

保元年と年号が改まった秋、若子がお生まれになった事は数人の外は知らぬ事で御座った。城下外れの日照院の離れに密か住み暮らし、極秘の事ゆえ安心致しておった処に刺客が現われ、老女と赤子が斬られ亡くなり申した」

「なんと…」

美作と半太夫が愕然として言葉を詰まらせた。

二人の驚きには、三代長軌には子が無く、

―嗣子無きは絶ゆ―

ところを、本家の重臣・野村祐春に嫁いでいた、初代長興の孫娘にあたる鶴子が生した子を、大慌てで養嗣子にした事情があったからである。

血筋の遠さと、一旦家臣に下りてからの、それも次男を大名としたのであるから、誠に苦い事情であった。

「恐らく将軍家世子裁定の御役目が書かれた書付の存在を嗅ぎ付けたので御座ろう。実はその時亡くなった赤子はあやめの子、生きておらば某の兄にあたる子に御座った。しかし、平六殿と母あやめは若子が亡くなった事と思わせる様、その場の辻褄を合わせ、直ぐに日田の広瀬家に件の書付と共にお逃がししたので御座る。広瀬家は元々御当家二代・長重公が財政建て直しの一環として日田に遣わしたる者にて、初代・五左衛門殿は新免の家より妻女を向かえて御座る。兵六殿とあやめは傷を受け、平六殿は傷の手当てもそのままに若子を背負うて日田に向かわれた為、それがもとで病に倒れ、一年ほどで亡くなられた。若子は、ここに居らるる三郎右衛門殿の父御・広瀬三代久兵衛殿の兄弟として育てられたので御座る。

「そなた等の兄や伯父御が然様な事に…」

黒田美作が再び言葉を詰まらせながら尋ねた。

「而してその若子は如何なされたので御座る」

「これよりは三郎右衛門殿からが良かろう」

典膳の言葉に、今度は三郎右衛門が話しを継いだ。

「若子は元服なされ芳之介様と名乗られましたが、日田にて手前

の父・久兵衛とその姉・栄の従兄弟を博多の親類より預かったという形にして、三人で兄弟のように育てられたそうに御座います。しかし、九つになられる頃、江戸屋敷ばかりか秋月にも再び怪しき影有りとの報せが日田に届き、日田の更に向こう、豊前下毛（ぶぜんしもげ）の禅寺、羅漢寺（曹洞宗）に預けられた由に御座ります。其処で、山国川伝いの難所の岩山に随道を掘られんとする禅海禅師に出逢われ、教えを受けられたとの事。十七に成られた時日田に戻られ、以降は広瀬家が代々の菩提寺、豆田町の長福寺（天正十二年１５８４開創・広瀬淡窓開塾の地）の宿坊に寄宿なされて博多屋を助くると共に、近在の子供らに読書きをお教えになる傍ら、父・久兵衛と共に日田代官・岡田庄太夫（俊惟）様に、公と民の両方に益せんと、様々に策を建じられ、重用されたそうに御座いまする。また、禅海禅師の随道（ずいどう）工事を支援なされんと日田代官所を始め、近隣諸国からも浄財を集めんとて様々に奔走なされ、長門から名工・岸野本右衛門様を呼ばれて随道工事に加担せしめられ、年にニ、三度は一月ばかりずつ羅漢寺に参られ、禅海禅師を助けて自らも鑿を打たれた由に御座います」

「彼の中津街道脇の羅漢寺隧道に御座るか」

「左様に御座ります」

田代半太夫の問いに三郎右衛門が答えた。

「元文四年（一七三九）。二十四歳に成られた折、尾張の宗春様謹慎の報せが届き、秋月にお迎えする事と相成りましたが、

―将軍家も新たに分家が立ち、秋月にも典膳らが居る故、既に秋月は安泰―

とお断りになられ、驚いた事に、御世話をしておりました父の姉・栄と夫婦になられ、日田外れの堀田村に住まわれて秋風と名乗られました。今、隠居致しましたる兄の平八が月下と号し住まい致しまする秋風庵（しゅうふうあん）に御座ります。一、二年は穏やかに過ぎて御座りまするが、寛保の頃（一七四一）から白蝋虫や大水・大風が続き、再び大凶作の兆候が出て参り、享保の大飢饉の惨状を繰り返さぬ為にと「

助合穀銀（すけごうこくぎん）」の制度を建言なされ、時の代官岡田庄太夫様は全村の同意を取り付けることを条件に御採用なされたました。これは年貢の外に、飢饉に備えて助合石を徴収し、これを銀に代え、日田の掛屋に貸し出し元本として貸して利息を取り、増やして基金と成し、万一の場合に村々に無利息にて貸し付くるという仕組みに御座りました」

三郎右衛門が一息吐いた時、典膳が言った。

「今、御公儀御老中・田沼主殿守様が、財政難に苦しむ全国の大名諸侯、また事業を拡大なさんとする商人・農民達に、貸し付け致さんと取組んでおらるる公金貸付の制の元に御座る。芳之介様が、何とか御公儀にも建白致すべく手立てが無いものか手紙にて仰せられたので、某がそのまだ頃御側衆のお一人であった主殿守様に内々に上申致し申した。八代様の御就位に係わりて以来、田沼家とは先代意行様からの密かな繋がり有るので御座る」

黒田美作は、江戸開幕以来百八十年、外様の大家が次々と取り潰される中、福岡黒田家が安泰であったのは、実は分家・秋月黒田家の奔走があった事に改めて驚かされた。

「三郎右衛門殿、続けられよ」

典膳が言った。

「はい。助合穀銀制度を確立せんと芳之介様は日田・玖珠（くすごおり）郡三十三箇村の庄屋を説いて廻り、助合石徴収の同意を取付けらたので御座ります。その様な最中、姫がお生まれに成りました。お慶びも束の間、延享元年（一七四四）。一帯が白蝋虫の発生、大風に続き五十年振りの大水に見舞われたので御座ります。数年の凶作に続く水害に、日田・玖珠郡の疲弊甚だしく、庄屋衆は幾度となく年貢の減免と夫食米拝借を願い出られたので御座りまするが、岡田代官は定免制（じょうめんせい）を取りし故と御取り上げにならず、翌年の洪水にとうとう、馬原村の庄屋・穴井六郎右衛門殿等が江戸表への強訴（ごうそ）を覚悟なされたので御座りまする。そうなれば、若し御取り上げ頂いたとしても直訴せし者は死罪。芳之介様は、四年間蓄えた助合銀を今年貸し出し

たばかり故、いま少し待てば、助合石銀の貸し出しが始められる事を懸命に説かれ、六郎右衛門殿も来年まで待つ事を承知なされたので御座ります。ところが、年明けからの助合穀銀貸し出しの約定を取り付けんと、日田代官所に揃って掛け合いに行かれし処、岡田代官は助合穀銀取扱いは御公儀御勘定所の裁定が必要と言い張られ、貸し出しを頑なに拒否なされたので御座ります。芳之介様が禅海禅師のお知恵を借りんと耶馬溪に出向かれし間に、六郎右衛門殿は江戸表に出立致し直訴なされましたが、評定所では御取上げにならず、その為、目安箱へ訴状を入れられたとて、捕らえられ御叱りを受けたので御座りまする。御取調の後一旦、翌延享三年（一七四六）には許されて放免された由に御座ります。これには田沼様の密かな手廻しがあったものと想われまするが、その冬日田に戻られし処を岡田代官の手によって再び捕らえられ、芳之介様が赦免を願われましたが、岡田代官は寛保元年の御定書百箇条を盾に取り、その日の内に浄明寺河原にて六郎右衛門殿ら三名を獄門になされたので御座ります。芳之介様の憤慨甚だしく、城井兼光の太刀を翳し、夜陰に紛れ刑場に忍び込み、警衛の士を切り殺して遺骸を取り戻し、親しく交わっておられた龍川寺の龍作和尚に頼んで密かに葬られたので御座りまする」

そこまで言い終えた時、三郎右衛門を始め、典膳も九郎右衛門も目を閉じ、涙を流していた。

そして九郎右衛門が替わった。

「此れよりは某が御話し申す。広瀬家より早馬が立てられ、ご家老宛てに書状が届いたのは翌師走晦日昼過ぎ。まだ十二歳であった某も愚父・四兵衛に付き従い駅馬を乗り継ぎ急ぎ日田に向かい申した。堀田村の秋風庵に到着致したのは師走晦日の夜半で御座った。其処にあったのは、面に白布の被せられたお二人の変り果てた御姿で御座った。広瀬久兵衛どのの話に拠れば、遺骸を奪い、龍川寺にて通夜を済ませた後、未明、お栄様に別れを告げられ日田代官所に出掛けられた由。お栄様の使いにより急ぎ代官所に出向いたる処、

門は閉ざされたるままにて、芳之介様、門前にて御切腹して相果てられ、『岡田代官の無慈悲と、民を援くべく発案なしたる助合穀の制度が却って民を苦しめ、斯様な災禍を招いた』と自らを責められる御遺書を残されて御出で御座った。御亡骸を秋風庵にお運び申し上げた時には、お栄様も御自害召されておって、虫の息にて未だ六つの姫の事のみを頼み遺されたそうに御座る。」

黒田美作と田代半太夫は更に声を無くした。

「此方(こちら)も下役とはいえ御公儀の役人を殺害(せつがい)致し、御公儀の手先たる代官を門前にて大声にて公然と非難致しており申すが、向こうも公にならば落ち度は免れぬ処にて、岡田代官は代官所内並びに近隣の者に固く口止めを致し、広瀬家にも何の沙汰も無く、ほとぼりが冷めるまでは姫を秋月にお迎えする事もならず、広瀬家にて引き取ったので御座る。それから七年、岡田代官転出の後、長貞公の御養女に致すべく目論み、一旦、御家老・渡辺家の養女として秋月にお迎えしたのが宝暦四年（一七五四）。十四に相成られた時に御座るが、直後、長貞公御逝去遊ばされ、しばし延期せざるを得なくなり申した」

「その後、姫は如何なされたので御座る」

黒田美作が尋ねた。

「御家老」

九郎右衛門が顔を典膳に向け、続きを促した。

「某の屋敷に姫が来られて四年。長貞公の後を継がれて五代様となられた長邦公の御養女にと手続きを進めて居った矢先、直方の東蓮寺黒田家から御本家六代となられた継高公から、某に直かに宛てた密書が江戸より参ったのは、確か宝暦九年（一七五九）の末の事に御座った」

典膳は辺りを見回して異常の無い事を確認したが、時折笹の葉擦れの音がするのみで、改めて続けた。

「ご一同。言う迄も御座らんが、これから申す事他言は無用に御座る」

皆が頷いた。

「その内容は先ず、前年の宝暦八年。覚えて御出でかも御座らぬが、京において徳大寺家の臣にて、闇斉学を奉じる竹内周斎なる学者が帝の御近習・徳大寺公城、烏丸光胤、久我敏通、正親町三条公積等の諸卿に神書・儒書を講じておった処、是に心酔し、徳川幕府の専制・摂関家の専横を良しとせず憤っておった一部の公郷が、侍講から帝への進講を為さしめ、果ては武術を披露為したりと、次第に反幕の気配が芽生えて来たので御座る。朝幕関係の悪化を憂慮なされた時の関白・一条道香卿等が、帝の御養母・青綺門院様を動かし、進講を止めさせようと為されたが果たさず。徳大寺卿を始め数名の公卿を罷免、その他十数名に謹慎を命じられた後，京都所司代へ告訴為されたので御座る。この時…」

そこで典膳は一息吐いた。

「この時、先の公卿の一人が、宮家のある若君を闇斉学の講義を兼ねた武術披露の集まりがあるとて誘ったので御座る。剣を良く遣われた若君は喜んで参加なされたので御座る」

そこで区切った典膳の言葉に、黒田美作が驚いて、

「まさか…」

「左様。既に御亡くなり遊ばされた将軍家御台所・心観院様の御兄君で御座る。ほんの一、二度参加なされただけに御座したが、将軍位御継承を間近に控え、この件が朝幕の離反を目論む者に利用されるやも知れぬと御心配なされた宮は、御自ら京を御出になる事を考えられたので御座る。関白・一条卿と時の京都所司代・松平右京太夫様が謀り、今は在りえぬ古代の大宰府政庁の御役職・太宰卒とし、任命されても親王は実際に赴任せぬ遥任官であったのを、大宰府に下って戴く事とし、家治公に密かに上申されたので御座る。これは、大宰府が乱世の中でいつしか消滅してしまい、朝廷にて正式に廃された訳でない処を上手く利用したので御座るが、当時二の丸に居られた家治公のご意向を受けられた、当時御側御用人であった田沼様より御本家六代・継高公に宮の受け入れの御相談があったの

で御座る」
「二十数年前とはいえ、その様な大事があったとは、本家にては預かり知らぬ事に御座る」
本家の家老である黒田美作が僅かながら憮然として言った。
「事が事故、極秘に御座った。御本家にても継高公と御家老・吉田栄年（さかとし）様のみ、当家にても某と此処におらるる九郎右衛門どののみで御座った。そもそも黒田家にご相談があったのは、大宰府を領しておるのみでなく、継高公が有栖川宮職仁親王や烏丸光胤卿に和歌を学ばれ、和歌伝授の書を贈らるる程に、宮家・公家の諸卿と親しき間柄にあった故と、又大宰府が当家の直ぐ目と鼻の先にあったからに御座る。また、御自らも良く和歌を詠まれる公方様とも親しき故の、公方様直々の思し召しでも御座った。当時、継高公が和歌の会を催され、しばしば大宰府に参られたのはこの所為に御座る」
「左様に御座ったか」
今度は黒田美作は素直に頷いた。
「そして、宮の受け入れにあたり、衛士に付いては九郎右衛門殿とその弟子に任せる事は直ぐに決したので御座るが、侍女の人選が簡単な事では御座らなんだ。その様な時、是を漏れ聴かれた姫が名乗りを挙げられたので御座る。最初は何と滅相も無い事をと御諌め致したが、上様のお声掛りにて、義理の御兄君でもあらせられる親王殿下をお迎え致すのに、並みの身分の者では相勤むる事適わず。姫にお願い申し上ぐる事と致し申した。最初は家治公御就位までのニ、三年の筈であったが、時の帝・桃園帝の御身体優れず、絶えず崩御の噂がありて、政敵にて留め置かれし事が後に判り申した。桃園帝崩御の後、皇子が幼少に御座した為、その御姉君・後桜町帝が一旦御就き遊ばして二年、帝位が安定して明和元年の暮れ、足掛け五年の後、やっと御戻りになられたので御座る」
「而して姫は如何なされた」
美作が尋ねた。
「無事、宮のお世話も終えられ、秋月に戻られ明けて明和ニ年と

なった初春。姫は玉の様な若子(わこ)を御生みになられた」
「なんと。若子を御生みになられたか」
「而して姫は。若子は」
黒田美作は立て続けに尋ねた。
「姫は若子の父親の事は口を噤(つぐ)まれ、決して御打ち明けにならなかったので御座る」
「なんと…」
「勝手に想いを巡らした事は有り申すが、軽々しく口の端に上(のぼ)らせる訳には行くまいかと」
「まさか…」
「さてそればかりは…」
そう言いながら頷くと、
「若子は或る処にて密かに御育て居り申す」
とも続けた。
そして、普段の好々爺然とした典膳とは別人の様な表情で、
「本日、斯様にお集まり戴きしは、今又、黒田家に再び暗雲が垂れ込めて居り申す！」
と決然と言った。
右京之典はこの様な典膳の厳しい表情を、嘗て見た事が無かった。
「一昨年、一橋家御出身の福岡黒田家七代・治行(はるゆき)様ご逝去の後を受けて、京極家より御養子にお迎えした八代・治高様、二月に御就位の後、五月に福岡入りなされて僅か三月にて突然のご逝去。生来身体頑健にしてしかも御幼少に非ず。然して、九代・斉隆(なりたか)様は再び一橋家より御養子をお迎えする事となった。そして今一つ、当家御当主・長堅様も永きに亘りて御容態優れず、日に日に御病気悪化の兆しこ此れ有り。安永八年将軍家世子・家基公御鷹狩の折に御休息遊ばしたる後の御急逝以来、一橋卿の関わられし処、怪しき事余りに多し。此度、斉隆様御幼少として、一橋家より介添役とて附人幾人か送り込み、御家乗っ取りを謀りし由、目付衆を御支配なされる若年寄・田沼山城守(やましろのかみ)様より密かに報せが参っって御座る。又、卿に

取り込まれたる御本家御重臣方数名、若し長堅様お亡くなりの砌(みぎり)は、嗣子亡き当家を取り潰さんと策動致せし事、御当家隠し目付頭を勤むる新免九郎右衛門の手の者によって判明仕った」

田沼山城守様とは、老中・田沼意次の嫡男で、昨年十一月、若年寄職に就いていた。

「まさか、先の大納言様始め、当家三代の御殿も御病気により身(み)罷(まか)られたのでは無いと申すか！」

「左様」

黒田美作の問い掛けに、典膳が静かに答えた。

「一月程前、当家江戸屋敷において御書物蔵に何者かが忍び入り、何かを捜せし形跡があったとの事、早飛脚にて報せて参った。又、秋月にても…。新免九郎右衛門！」

典膳が九郎右衛門に促した。

「はっ。先だって、此処に並びし墓塔のニ、三に荒らされたる形跡有りとの事にて、見張り居りましたる処、何処ぞの密偵と想わるる怪しき者一名現われ、取り押さえんと致しましたるが叶わず、逃げられて御座る」

典膳が継いだ、

「恐らく、当家の内密の御役目に拘る書付を捜しての事と推察仕って御座る」

その言葉に美作が、

「それも民部卿(みんぶきょう)の…」

「間違い無き事かと。南冥殿」

今度は南冥に話を促した。

「江戸表に御座します長堅様の御病状。典膳様のお手配にて、江戸家老・吉田作座衛門様を通じ、嘗ての同門の医師を内々に屋敷に登らせ、診察せしめたる内容を詳しく書き送らせたものを読みまするに、肝の臓に痼りの有る様にて、恐らく何らかの形で永らく毒を摂取いたされたものと想われまする」

「毒とな…」

黒田美作は声を途切れさせた。
「恐らくは石見銀山（殺鼠剤）と同じ砒石の毒かと。長崎御番に御出役なされて御出での九郎右衛門様の御子息・勇太郎様に早飛脚を立て、出島の阿蘭陀商館の医師に密かに問合せたる処、御本家御先代・治高様は急激な砒毒の摂取による中毒。長堅様のそれは微量の砒毒を数年に亘り摂取され、少しずつ御身体の変異を来たされたものかと、私の見立てと同じに御座りました」
「なんと」
南冥は話を続けた。
「先の大納言・家基様の御急死についても、その三日前の御鷹狩の帰途、急に御不調を訴えられし数刻前、江戸近郊の大森村の百姓屋にて八つ下がり（午後三時）の食餌に饂飩を食されし由、若年寄・山城守様の御配下が突き止められたそうに御座ります。砒毒のある種は饂飩粉と見分けがつかぬ白き粉様のもので、湯に良く溶けるものや蝋燭に混ぜし物など様々にある由。また、阿蘭陀商館長・チチング殿によれば欧羅巴州では多少の金子を積めば誰でも暗殺薬として購う事が出来る程に市中に出回って居るとの事に御座ります。長堅様の御余命、誠に遺憾ながら幾許も無き由、同門の医師の見立てによって明白に御座ります」
「左様な事を、民部卿は為されておるのか…」
黒田美作の声は掠れ、その声音は暗澹としたものであった。
「最早、吾等も起たねばなりませぬ！」
典膳が決然と言い放った。
「先ず、美作様は信頼に足る者のみを集め、一橋家よりの附け人送り込みを何とかお防ぎあれ。吾等は東照神君より賜りし岡本正宗の御短刀を回収致し、江戸に上りて三代家光公より賜りし秋月黒田家の御朱印状を長堅様より頂戴して参る。そして、至急田沼様と対抗策を練るのじゃ。当家が潰るれば即、御本家の存続も危うき事態となるは必定！」
「三郎右衛門殿。御短刀の行方は何か分ったな？」

「兄・平八と共に様々に調べましたる処、芳之介様の御日記の中に、お栄様と夫婦になられた直後、羅漢寺の禅海禅師を尋ねられた事が記されておりました。其の折、秋月の御家も既に御安泰故と、羅漢寺か何処かに何がしか奉納なされたと思われし記述が見つかりまして御座います。恐らくは彼の地かと」

「相分った。九郎右衛門殿」

次は九郎右衛門を促した。

「江戸表には、某の弟子で在ったもの二名が御書院番を致して居りまする。御本家には新免の一族の家がニ家御座る。何方にも既に臨戦の下知を致して御座いまする。そして、此れより様々に遊軍の動きを為し、暗雲を切り開き、黒田家と天下の泰平を守りたる者は…」

ここで一度区切った九郎右衛門は、右京之典を振り返って、

「某の弟子、此れなる新免右京之典。秋月円命流総ての技、更に秋月にのみ伝わりまする隠し奥義十七手を奥許し致したる者に御座りまする」

己が生きてきたものを遥かに越える壮大な歴史に圧倒されて、呆然となっていた右京之典は、はっとして九郎右衛門を見返した。

「右京之典。皆様に、そして歴代の殿に御見せ致すのじゃ」

そう言うと、九郎右衛門は後ろに置いていた桐の箱から一振りの太刀を取り出し、右京之典に差し出し、

「此れを使え」

と言った。

それは、

―黒墨粉塗沙綾形文鞘渡金波図金具―

に拵えられた立派なものであった。

「筑前太守、黒田家の祖・長政公より秋月初代・長興公に与えられし大切物・備前兼光。又の名を城井兼光じゃ」

「その様な名物を私が…」

言葉を詰まらせた右京之典に九郎右衛門が優しく言った。

「これから、そなたが中心となり、黒田の家を守る闘いを為すのじゃ。そなたに預くる」
典膳の方を見ると、典膳も頷いた。
その時。右京之典は母の遺した「天命」の言葉を想い出していた。
「然らば、お預り致しまする」
右京之典は兼光を押し頂くと、床几を立ち、信国重包の脇差の横に差し添えた。
羽織を脱ぐと、皆が座る莫蓙の前から下がり、充分に動ける間合いを確保した。
立ち並ぶ歴代領主の墓塔を背にして、右京之典は静かに立ち上がった。
「御披露仕りまする。何卒、ご検分下されませ」
一礼し、瞼を閉じて、ゆっくりと兼光を抜き放った。
刃長、二尺二寸四分。
兼光は、南北朝期に活躍した備前の長船鍛冶の嫡流で景光の子と伝えられ、同じ長船派の刀工の中でも一際雄大な姿と豪壮な造り込みの刀を打った。
（なんと、斯様にも御成長か…）
その雄大で、しかし何物にも拘らない大らかで自然な構えに典膳は感銘を覚えた。
右京之典の大声ではないが、よく通る声が響いた。
「秋月円命流秘奥義。一刀太刀・水月」
それは昨日、九郎右衛門が見たときよりも更に研ぎ澄まされ、その動きには何処にも無駄が無く、太刀風は迅速な筈なのに、ゆったりと大らかに見えて、皆は雅な舞を見るかのような心地であった。
そして、最後の小太刀法五手目「抜胴」の後、正に納刀を終えんとした瞬間、
―ぶひっ―
塀の外から声がして、皆が又、猪かと想った直後、
―ドンッ―

という大音とともに閉ざされていた屋根門の扉が突然乱暴に押し開かれ、一頭の大猪がこちらに向かって突進して来た。
門の外側には番をしていた二人の従者が倒れているのがちらりと見え、皆が腰を浮かし身構えた時、一番門側に居て、猪に向かって構えの姿勢を取った九郎右衛門に、右京之典が、
「お師匠様！」
と叫ぶと同時、大猪と擦れ違い様に身を躱した九郎右衛門が、掌の底で猪の後頭部を叩くと、大猪はそのまま地面につんのめって行った。その最中。
―サーッ―
と、立ち並ぶ墓塔の背後の白壁の向こうの竹林から、二本の大竹がこちら側に倒れこんで来た。
「あっ！」
三郎右衛門が声を発し、大猪と九郎右衛門に目を奪われていた一同が振り返ると、地上まで倒れこんで来た二本を縛って纏(いまし)めた竹の笹の葉の中の黒い人影が、先程まで南冥が座っていた茣蓙の上に置かれていた書状の一つを掴み取ると、綱に引き上げられて再び虚空に戻ろうとしていた。
咄嗟(とっさ)に右京之典は曲者目掛けて小柄(こづか)を擲(なげう)ち、九郎右衛門が、竹を引っ張っていた綱目掛けて脇差を擲った。
竹を引っ張り上げていた綱が切れ、一瞬戻りが止まり掛けた二本を結わえたた大竹の反発力はさすがに強く、地上に倒れる事は無かったが、宙空で動きを鈍らせた。
その時、倒れこんで来たもう一組の竹に取り付いた別の曲者に書状を渡すと、一番手の曲者は地上に落ちてきた。
「追え、書付を取り戻すのじゃ！」
九郎右衛門が言うよりも早く、右京之典は走り出すと、小柄が突き立った左肩を抑え、剣を抜いて身構える曲者を、一瞬の早業で峰打に倒し、塀を乗越えて行った。
「斬捨てても構わぬ！」

「はっ」
塀を飛び越えながら右京之典は答えた。
竹林の中に飛び込むと、縄を引っ張っていた二人の曲者が右京之典の余りの素早さに圧倒され、一人は剣を抜く間も無く、もう一人は剣を抜いたが構える間も無いまま、二刀の技に同時に峰で肩口を叩かれ地に伏した。
書付を奪い取った曲者が取り付く竹は、その間に先程とは逆の方向に倒れ込んで行き、竹林の向こうの地上に降りると駆け出した。
かがり火の明かりは塀に遮られ既に遠く、手にしていた二刀を素早く鞘に納め竹林を抜けると、月も無い星灯りのみの獣道を走り出した。
曲者を追いながら、右京之典は己の未熟を悔んだ。
（古心寺へ石段を登る時聴いた犬の遠吠えは、この曲者達に対してではなかったか。最初の猪の泣き声と枯れ枝を踏み折る音は書付を奪い取る準備を為していたのではないか…）
獣道から白坂道に出た曲者は道を下った。右京之典との距離は四間程であった。
走りながら、右京之典は懐から二尺程の紐の両側に錘（おもり）のついた物を取り出すと、曲者の脚目掛けて、
―びゅん―
と擲った。日田の広瀬家に居た子供の頃、三郎右衛門やその兄の平八にせがんで貰った分銅に、二年ほど前想い付いて自分で紐を付け、擲つ練習をして来た物であった。
それが絡まり、
―どたっ―
っと脚を縛れさせて倒れた曲者は、坂を転がりながらも素早く起き上がると、逃げ切れぬと悟ったか、振り向いて剣を抜いて正眼に構えた。
「何物じゃ！」
ちょうど古心寺の山門へ続く石段の麓まで降って来ていた曲者の

姿を、燈篭の明かりが朧に浮かび上がらせていた。
「何方(どちら)かのいかがわしき企てに加担致すものか？」
曲者からの返事は無い。
目だけが出された黒衣の装束に、刀は忍びが用うるという二尺程の短い脇差程度のもので、構えからは、曲者四人の内では一番遣えるように推察された。
「先程の書付如何致す。返してくれぬか」
右京之典の静かな問い掛けに、曲者から殺気が放たれた。
―母上様。此れが宿命に御座りましょうか―
右京之典に不思議と恐れは無かった。そして、相手に合わせて脇差の筑紫国信包を静かに抜いた。
「御相手仕る」
相正眼。
間合二間から、一寸、二寸と互いにじわじわと間合いを詰めて行く。
どれくらい無言の対峙が続いたか。突然、右手の斜面の草叢(くさむら)から、眠りを妨げられた山鳥が羽音を立てた瞬間、二人が動いた。
突進した両者が擦れ違って再び間合二間、互いに残身体。
同時に振り向いて、再び正眼に着けた時、右京之典の左の袂が一寸程切り裂かれていた。
相当な遣い手である。
忍びは情報の収集や風説の流布、敵後方の撹乱、毒による暗殺等を隠密裏に行う術に長け、それらを売り物にして主家を渡って行く反面、極力闘いを避け、剣等の武芸を一通り以上極めるような事は余りせぬものと、九郎右衛門からは聴いていた。しかし今、右京之典が対する忍びは、手を抜いてあしらえる相手ではなかった。
曲者は右京之典の腕を互角、あるいはそれ以下と見たのか、なんと右京之典に話し掛けたのである。
「お主、流儀は何じゃ」
「秋月円命流」

「聴いた事も無い田舎流儀じゃな」
更にその態度に余裕がでたようであった。それが普段喋らぬ者を饒舌にさせた。
「吾等は金で雇われて隠密仕事を為す。じゃが雇い主の名を明かす様では仕事は来ぬ。中身は知らぬが書付一つ金五百両じゃ。料理屋の一軒でも買おうかの。たまたま墓荒らしに来てみれば、其の方等が持参して呉れよった」
優位に立ったと想った曲者は笑っていた。
「書付を返して頂けぬか？」
「確かもう一つ書付があったな。あれも渡せば命は助けてやるが…。千両はどうも儂一人の物になったようじゃ。一度に二件の店持ちか」
「某は人を殺めた事が無い、出来ればそなたも殺めとうは無い」
「呆けた事を抜かすで無い」
既に勝ち誇ったような言い回しであった。
「ならば致し方なし」
右京之典はそう言うと、刃長一尺六寸四分。八代将軍吉宗の「全国御刀御改」で、
―元先の身幅が詰まり、中切先が伸びて平肉が豊かにつく地金は板目よく詰んで、地沸厚く付き、地景が絡んで地より沸きたつ―と評された筑紫国信包を持った右手を、相手の目線まで上げた。
「秋月円命流秘奥義。小太刀法…」
そこまで口にした時、稲妻の如き刺突が襲って来た。
右京之典は左肩を退いて半身となり、相手を迎え入れながら突きを躱しつつ、信包を持つ右手を突くようにして切先を相手の左の首筋へと延ばした。
―転瞬―
今度は相手の近づくのに合わせて腕を縮めながら、まるで信包の物打ちが首に纏わり付つくように、そこを中心に相手の右脇を擦れ違いながら背後に回り込み、縮めた腕を伸ばしつつ飛び退りながら、

後ろから相手の右の首筋を曳き切って、再び正眼に構えた。
　それらの動きはすべて一瞬の事で、曲者は首筋に冷やりとしたものを感じたが、まさか、右京之典の突きを軽く躱した自分が斬られているとは想いも寄らず、再び振り向き、構えを取ろうとした。しかし、俄かに目が眩んで適わず、
〔何っ？〕
っと、出した積もりの声が声にならず、虎落笛のような
「ひゅーっ」
という音だけをその喉首から漏らすと、肩口にぬるりとしたものを感じながら、己の膝が崩れ折れて行く記憶が最後であった。
「小太刀法、短長」
　小さく呟き、ゆっくりと息を吐きながら構えを解いた右京之典は、刀身に血振りを呉れ、内側に鹿の裏皮を縫い付けた秋月円命流独自の『拭い袋』から、拭い用の紙と布を取り出すと、何度も丁寧に拭い、今度は拭い袋を裏返した皮で丁寧に拭い上げてから鞘に納めた。
　この技は、豊後にあった流祖・無二之介が、伴天連の刺突剣法「エペ」なる技に対抗する為に編み出したという、小太刀の隠し奥義の一つであったが、相手の内懐に入る為に、大きな危険を伴う。それでも「短長」の技を使ったのは、曲者に奪われた書付を守る為であった。
　既に息絶えた曲者に合掌し、懐を探って書付を取り出すと、右京之典は再び古心寺への石段を登りながら、致し方無き事であったとはいえ、たった今、直接は己に何の恨みも無い相手を殪し、そしてこれから、
　―このような闘いの中に、身を投じて行く事になるやも知れぬ―
との想いに、胸の内に忸怩たるものをやはり禁じ得なかった。

四章、旅立（前書き）

自分の宿命を知り、日田へと向かうこととなった右京之典は、自らを囮として曲者をおびき寄せる為、険しい山越えの路を辿ることを決意する。

四章、旅立

古心寺(こしんじ)の墓地に戻ると、三名の曲者は縛(いましめ)められて、最初に書付を奪い取った曲者は南冥が手当てを行っていた。美作(みまさか)の二人の従者は当身を喰らわされただけで、無事であった。

「取り戻したか」

九郎右衛門の緊迫した問い掛けに、右京之典は片膝を付いて答えた。

「はっ」

「曲者は如何致した」

「残念ながら、勝負の末殪(たお)しまして御座りまする。亡骸(なきがら)は当寺の石段の下に」

田代半太夫が目で合図を送ると、二人の従者は三人の曲者を引き立てていった。亡骸の始末もするのであろう。

右京之典が懐から奪い返した書付を取り出し、渡そうとするのへ、

「そなたが持って居れ」

と言い、そして、

「掛けよ」

と床几を指した。

応急の手当てを終えた南冥によると、曲者の傷は命に係わるようなものではないとの事であり、皆も莫蓙(ござ)に座り直すと、姿勢を正した。

そして、改まった典膳が右京之典に向かって口を開いた。

「先程、美作様にもお話申し上げて御座りまする」

その言葉を待っていたかの様に、六人が右京之典に向かって一斉に平伏した。

「何を…」

右京之典が言おうとするのを遮って、

「右京之典様。其方様は先程お話申し上げましたる秋月黒田家三代・長軌(ながのり)様の若君、芳之介様が遺されし由布(ゆう)姫様よりお生まれ遊ばした秋月黒田家の本流。そして、黒田家を守るべき秘太刀を会得なされ

た。何よりも、家祖・長政公が、東照神君より徳川家の世子を采配すべしと任じられし御役目を引継ぐべく選ばれしお方に御座りまする」

「爺…」

「福岡、秋月両黒田家の命運。政事(まつりごと)を私せんとする者共が跋扈(ばっこ)致すいかがわしき天下の趨勢。右京之典様の采配にお預け申し、一同打ち揃って御指図に従い奉りまする」

右京之典は言葉も無かった。

「御師匠様…」

右京之典は九郎右衛門を縋るように見た。

「非礼、お許し下され」

先ず右京之典を、そして皆に視線を送った九郎右衛門は、再度平伏して上体を起こして言った。

「師として最後の命に御座るっ。右京之典、恐らくこの者共の仲間が峠の辺りに待機しておろうし、刻限までに戻らねば、此方の動きを江戸に報ずるやも知れぬ。幸い書付も奪われて居らぬし其方の存在も知られて居らぬが、江戸の殿（当代・長堅）の御容態宜しからず。先の御家老が言われた通り、先ずは東照神君より賜りし岡本正宗の御短刀を回収致し、江戸に上りて三代家光公より賜りし秋月黒田家五万石の御朱印状を、殿より御預りして参るのじゃ。そして、早急に田沼様をお尋ねして対抗策を練るのじゃ。幕格はほぼ田沼様の御朋輩衆が固めて居らるる故、敵は却って荒業を仕掛けて来るやも知れぬ。此れまでも数度刺客に襲われられし由、書き添えてあったそうじゃ。正に風雲は急を告げて居る。右京之典、急ぎ発て！」

右京之典は六人の者を見た。

その相貌には、縋るような、そして強い期待が込められていた。

辣腕家老であった典膳と妻・綾野が、自らは

―爺、婆―

と呼ばせながら、身分も無き自分に対して、

―右京之典様―

と呼び慣わしていたことに、今になって気付いた右京之典であった。
典膳が言った。
「右京之典様。澤空庵(たんくうあん)にて、綾野が仕度を整えて居りまする。三郎右衛門殿と一緒に日田へ御向かい下さりませ」
「畏まりました」
「右京之典様。公に出来兼ねるとは言え、右京之典様は福岡、秋月、黒田両家の真の統領。いやそれ以上…。然して吾等はその臣下に御座りまする。其の様な御口利きは無用に御座ります」
しばしの沈黙の後、
「相判った！」
右京之典は既に決断していた。
―母上様。これが天命に御座いますな。
己の想うまま行けばよう御座りまするな―
心の中でそう問いかけると、右京之典は立ち上がった。
「では、参る」
「御城下出口の眼鏡橋の袂にて御待ち致して居りまする」
そう言う三郎右衛門に対し、
「否。何処に隠密が居るやも知れぬ。三郎右衛門殿は早駕籠(はやかご)にて行かれよ。某は別の路より参る」
と言うと、今度は九郎右衛門に向かって、
「日田に安着するまで、三郎右衛門殿に警護を付けよ。曲者は、西国の訛りとは違っておったし、書付一通金五百両と言い居った故、恐らく江戸で頼まれたものであろう」
右京之典は、大坂以西の経済は銀貨で成り立っており、報酬の受け渡しの約定が江戸で行われた故に、店一軒などとの胸算用が直ぐに出来得るのであろう事を言った。そして今夕、城下に入った時の犬の遠吠えが移動していく様を思い出していた。
「あの者共は書付が如何なる物かも知らされて居らぬし、今宵も元々は墓を暴きに参って居った。彼奴等は此処に集いし者の身元も判っては居るまい。しかし遠くで別の者が見張って居る気配がある。

明日より警備の手立てを考えよ」
「御尤もな仰せ。畏まりまして御座りまする」
九郎右衛門の答えるのに続いて、典膳が聴いた。
「然して、右京之典様は」
「古処山(こしょ)から馬見山(うまみ)を越え、上座郡(じょうざごおり)の小石原(こいしわら)、宝珠山(ほうしゅやま)と抜けて日田入り致す。皆気を付けよ」
「ははっ」
皆が一斉に平伏した。
「暫しの別れじゃ。堅固でな」
「右京之典様も」
六人が見送る中、右京之典は古心寺を後にした。

澤空庵へ戻りながら、古心寺の石段下で曲者の一人を斬って殪した時、遠く何処からか見られているような違和感を感じたことを右京之典は想い返していた。
(あの違和感はその後直ぐに、まるで遠ざかる様に霧消していった。最初、古心寺に向かう時のあの犬の遠吠えは、初めは御城の方より聴こえて来て、それが次第に己の歩む道と交差して消えた。そして古心寺の石段を登る時、再び近くで遠吠えが起こり、確かに最初の時と同じ方向に遠ざかって行った)
そして、
(先程の曲者とは別の者達が秋月に潜行していて、城内か重臣の屋敷に忍び込むか見張るかした後、想いも掛けず自分と行き合い、人気の無いあのような刻限に一人道を急ぐのを怪しんで後を付け、古心寺に集まった者を確かめたに違いない、或いは、先程の曲者達の守備を遠くから見届ける役目か…)
右京之典は、頭の中でもう一度これ迄の事をなぞると、確信した。
(直接襲うて来なかった処からして、あの者達は一橋卿にでも直接仕える密偵。もっと綿密に、そして密かに事を為す、却って厄介な相手ではないか。あの者共を殪して置かなければ、典膳達に危険が

降りかかるのではないか。今、己のみが何者かは知られていない）
そう想ったからこそ、三郎右衛門とは別行動を取ることにしたのだ。
（密偵はは二人か三人。恐らく秋月街道のどこかに潜んで、自分を付けてくる筈。そして、先程の奪い合いの基になった書付を所持している人物という事が判れば、尚の事何処までも追って来るだろう）
城下との境の小橋を渡った処で右京之典はわざと立ち止り、懐から二通の書付を出して確かめ、然も大切そうに懐に仕舞い込むと、野鳥村の澤空庵に向けて再び歩き出した。
澤空庵の門前まで戻った時、微かに気配を感じが、おくびにも出さず門を潜ると、未だ灯りの点る戸口へ入っていった。
「婆、戻ったぞ。遅くなった」
「遅くなられましたな。寒うは御座いませなんだか」
「おお。婆の作ってくれた羽織のお陰で暖かであった」
「それはよう御座りました」
綾野は満面の笑みを浮かべて右京之典の羽織を脱がせながら、
「夜食を作っておりまするぞ、召し上がられませ。仕度を致しますでな、先に湯屋にいきなされ」
「湯まで沸かしてくれたのか。有難く頂戴しようぞ」
右京之典は用心の為に、濡れぬ様にして脇差と書付を湯屋に持ち込み、湯に浸かりながらこれからの策を思案した。
今度の曲者は金で動く者達では無い。慎重に事を運ぶ筈であった。
万全の準備を為して挑んで来るに違いない。
（それならば、敢えてこれからの己の行動を知らしめ、その道中におびき寄せればよいではないか！）
右京之典は明朝出立する事に決めた。
（日田まで山中に泊することになろう。そうなれば数日は湯にも入れまい）
そして暖かな湯の有難味を存分に味わった。
殺気のない柔らかな気配が戸口に立って、
「右京之典様。お背中を流しましょうかな」

「爺…」
典膳だった。
「戻らぬかと想うて居った」
入ってきた典膳に右京之典が、
「爺こそ寒かったであろう。某が爺の背を流そう」
「左様なことは…」
遠慮する典膳を座らせて、湯を掛けまわし、背中を手拭で洗い始めた。
「勿体のう御座りまする」
「明朝、出立致す」
「左様に御座りまするか。既にお立ちにて、お会い出来ぬかと想うて居りました」
「その積りでおったが、やはり新手が三人程現われおった。此処も見張られて居る」
「なんと。何も御座りませなんだか」
「今度の曲者は恐らく一橋卿に直接仕える密偵。やはり簡単に人前には出て来ぬ。よって今夜は安心じゃ」
「左様に御座りまするか。然してその狙いは如何に」
「某が持って居る書付と、某自信じゃ」
「右京之典様を？」
「そうじゃ。彼奴等には某が何物かまだ判って居らぬ。じゃがその者が重要な書付を所持して居る」
「成る程」
「よって、此方の行く路を教えて、おびき寄せるのじゃ」
「危険では御座りませぬか」
「日田迄の険しい山道、某にとっては吾が城で戦うと同じじゃ。それに、恐らく爺達の身元と、一橋卿の陰謀を見抜いて居る事も知られた。彼奴を此方に残して行く方が危険じゃ」
「なんと右京之典様は、吾等から引き離す為に囮になると申されまするか。お止め下さりませ」

「心配致すな。闘いが始まった以上、それが某の道じゃ。決して遅れは取らぬ」
「しかし…」
「それより、夜食の時、少々酒でも酌み交わし、明日からの行程、大声にて話あうおうぞ。彼奴に聴かせてやらねばならぬでな」
「判り申した」
「それより某の御父上様とは、どの様な御方であろう。爺は何か知っておるのか」
「月青院様は、決して御漏らしになられませなんだ。形見の短刀を何時も持っておられれば、必ずや何時か御逢いなされる事も御座りましょう」
「そうか。そうであろうか…。しかし、今はその事は仕舞っておこう」
典膳は漏れそうになる嗚咽を噛締めると、涙を汗に紛らわせた。

右京之典が先に湯から上がり自分の部屋に戻ると、旅の仕度が為されていた。
小袖、袴、道中羽織に手甲、脚判。それに充分な路銀。
道中嚢には薬や糒、干し味噌などの糧食。火打ち石に付け紙。手拭、雨具に寒さ凌ぎの紙子の一衣。矢立、竹筒に笠は檜の塗笠。
足袋は筒の長い皮底の紐足袋が二足、そして草鞋が三足。よく見ると、草鞋は木綿と更に人の毛髪が入っているようだった。これは綾乃が自ら編んだのであろう。
以前九郎右衛門から、嘗て戦場や長旅に赴く時は、何事があっても切れる事の無いよう、女人の長い髪を編み込んだ草鞋を履く事があると聴いたことがあった。
右京之典は、綾野の心尽くしの餞に、長い旅が始まるのだと、改めて感慨を催した。
（斯様にも想うて呉れる者が居る。もう不安には想うまい）
そう心の中で呟くと、綿入れを羽織り部屋を出た。

もともと庄屋の別邸であった屋敷には板の間があり、囲炉裏が切ってあった。赤々と燃える火には鍋が掛かり、味噌の香りが漂い、既に湯から上がった典膳が右京之典を誘った。
「早々、お掛けなされ」
「美味しそうな匂いじゃな」
右京之典が言うのへ綾野が、
「近くの百姓屋に野菜を求めに参りました処、兎が取れたばかりと申す故、購うて参りました」
と説明を加えた。
「夕餉抜きであった故、腹の虫がなっておる」
「さあ、たんとお食べ為され」
蓋を取った鍋からはもうもうと湯気が上がり、綾野がよそってくれた椀には兎肉の他、大根、牛蒡、蒟蒻などが入っており、濃い味噌の香りが食欲を刺激した。
「美味い！熱っ…」
右京之典は想わず大きな声で言った。
「美味しいので御座りまするか？熱いので御座りまするか？」
「慌てずともまだたんと有りますぞ。酒もお飲みなされ」
典膳と綾野の二人は顔を見合わせて笑った。
大いに食べ酒も程々に飲み、典膳と湯屋で打合せた通りに、書付を所持したまま明日朝出立することや、路程について声高に話した。
綾野が、明日の出立の為に飯も炊いたと言うので、菜の花の漬物で飯を食すと、
「明日は握り飯を用意致して置きまするでな」
「明日は六つ（朝六時頃）の遅発ちじゃが、今宵はもう遅い。在り難いが握り飯は某が作る故、明朝の見送りは要らぬでな」
綾野の申し出にそう言うと、部屋に戻って備前兼光の太刀と筑紫信包の脇差の手入れをした。
太刀とは、悪しきものを、
―断つ―

物であるところから来ていると言う。
太刀の輝きは神話の時代よりの、光を集め、神々しい輝きで邪悪なものを映し出し、またそれが宿る事を防ぐ神力を備える「鏡」と同じであり、太刀は且つ、それを払い除け、打ち断つ事が出来る神の御剣であり、改めて見る兼光の刀身も、太刀と言う名の源に相応しいものであった。
その外、身に付けて行く手裏剣などの武具や手入れ道具を揃え、床に就いたのは九つ半（深夜一時頃）を過ぎた頃であった。

翌朝六つ前（六時前）。短い時間ではあったが、十分な睡眠を取った右京之典は出立の仕度を調え離れに行くと、母の位牌に旅中の加護を願った。
離れを出ると、満開の老梅が咲き誇る庭に、典膳と綾野が立っていた。
「見送りは要らぬと申したに」
「左様な事が出来ましょうや」
二人の眼には涙が光っていた。
綾野が二食分の握り飯の包みを差し出し、右京之典はそれを道中嚢に入れると、
「某が戻るまで、身体を厭うて堅固に過ごすのじゃぞ」
「右京之典様も」
「旅の水には用心せねばと申しまする」
それぞれが言い、打ち揃って門前まで来ると、
「参るぞ」
と言う右京之典に、
「御武運をお祈り致して居りまする」
「必ずや御無事でお戻り下さりませ」
と言うのに、
「畏まった」
と快活に答えると、既に歩き出していた。

ニ十間程も進んだ頃か、振り向いた右京之典が、
「初めての一人旅じゃー。愉しんで参るぞー！」
と大声で叫んで大きく手を振った。
「おお、そうなされませー！」
典膳も大声で手を振って答えた。
次第に遠ざかってゆく右京之典を、瞬きもせず見詰めながら、
「どれほど過酷な旅になるやも知れぬのに、あの様に明るくお振舞になられて…」
「私達は右京之典様を信じて居れば良いのでは御座りませぬか」
二人は小さく呟くと、せめて右京之典の後影の見えるまではと見送った。

塗笠を手に、右京之典はぐんぐんゞ歩いてゆく。
野鳥村から古処山へと続く道は晴れ渡っていた。
山の西麓の所為で、まだ陽が射し込んでは来ぬが、見上げる空は雲一つ無く、薄紅の朝の光に輝き渡っていた。
まだ鳴き慣れぬのか、
―　ホー、ホー。キョッ　―
と、初泣きの鶯の声が谷に響き渡り、何の小鳥か、右京之典の前を矢のように飛び去って行った。

五章、塔の瀬越え（前書き）

自ら囮となったが、早めに決着をつけようと、わざわざ難所の峠道「塔の瀬」越えを選んだ右京之典に、突然に刺客の罠が襲い掛かる。

五章、塔の瀬越え

野鳥村より古処山の頂きを経、屏山、馬見山へと尾根伝いに越えて、豊前との国境・嘉麻峠に下り、九州修験道の聖地・英彦山麓の小石原村から宝珠山村と抜けて豊後国日田郡に至る行程は、右京之典の健脚を以って駆け通せば一日一泊でも可能であったが、右京之典は一泊二日の旅程を考えていた。

急ぎの旅ではあったが、どのような罠が仕掛けられているのかも分らぬし、わざわざこの様な人の通らぬ山道を選んだ目的は、第一に敵を誘きだす事にあったからである。

それでも右京之典は、明日の宵には日田に入る積りであった。

先ず古処山への登りでは、二人の山伏が降るところと擦れ違った外は、怪しい事は何も無かった。しかし、路に付いた新しい足跡の中に、普段山に登り慣れたものとは違うものを幾つか見つけていた。体重の懸け方が違うのだ。

このような山中を通るのは殆どが修行の者か若しくは遍路。普通の商人などが通ることは先ず無い。どちらかに化けている筈でありまた、そうしなければ怪しまれるであろう。

その異なった足跡は二つ。右京之典は澤空庵を出て暫くしてから、何となく後方に気配を感じていた事を考え合わせ、二人が先行し、残る一人は後を付けているに違いないと想った。

所々雪の残る通いなれた山道を僅か一刻半（約三時間）程で山頂まで登ると、竹筒の水で口を湿らせ、遥か下界を見下ろした。

それは一月前、千日修行の最後にこの山の頂きを踏んだ時とは何処か違って見えるような気がした。

箱庭の如き秋月の城下を見下ろしながら、右京之典は心の中で、

―　年たけて　また超ゆべしと思ひきや　いのちなりけり　小夜の中山　―

と心の内で呟いた。

（母上様。無事にまた、此処に戻って来る事が出来ましょうか…）
西行法師の歌に重ね合わせ、数日の内に激変した己の身を改めて想った。
小憩とも言えぬほんの僅かな時を過ごすと山頂を後して、緩やかな尾根伝いの下り坂を再び黙々と進んでいった。
凡そ二千九百尺（八六〇メートル）の古処山から三千余尺（九三〇メートル）の屏山への道は幅五尺程か。余り高低の差も無く、比較的真直ぐで緩やかな登りが続いていた。
白い石灰の岩が剥き出した尾根伝いの道には背の高い植物は生えて居らず、前後左右の見通しが利いた。
（これでは襲いようも無いか…）
右京之典は苦笑した。
敵を誘き出す為にわざわざ選んだ山道であったのに、これではどう仕様も無い。
四半刻もせぬ内に屏山の頂き越え、そのまま三千二百余尺（九八〇メートル）の馬見山への緩やかな上りを進んで行くと、次第に木々が増え、やがて両側を高さが六十尺（一八メートル）を遥かに越える杉の林が遮っていた。
二十数年前、典膳らが財政改革の第一歩として進めた植林の結果がこうして見事に実ったのだ。
古処山の頂きを出てより小半刻で馬見山の頂を過ぎたようであったが、深い木立に囲まれていて何処が山頂かははっきりとしなかった。ただ道が緩やかに下り始めていた。
この間、一度だけ山伏と擦れ違っただけで、曲者が襲い来る様子は微塵も無かった。
このまま真直ぐ降れば、豊前と境を接する小石原村の外れにある嘉麻峠に辿り着く。そうなれば山中とはいえ交通の要衝でもあり、人通りのある表街道筋を暫く歩く事になる。
出来れば早めに決着を付けたいと考えた右京之典は分かれ道の前で立ち止り、暫く考えると、予定を変え右に折れ、秋月領内の江川

村から小石原村へと抜ける往還へと降り、難所の塔(とう)の瀬を通って小石原へ向かう事にした。
塔の瀬は、秋月城下の南を流れる小石原川を南東に遡り、深い谷を上った山間に位置する江川村から更に上流の上座郡(じょうざごおり)小石原村へと抜け、博多・福岡や肥前と、霊場・英彦山そして豊前南部の諸国を結ぶ往還の途中、凡そ一里半程の（6キロ）の難所で、小石原から流れ下る川が削った深く狭い谷間の崖に切り通した、狭く曲がりくねった険しい道であった。
山道を駆け降り、塔の瀬の難所の手前で往還に出た右京之典は、左手に十間ばかり入った畦道にある野地蔵の傍らに立つ、葉を落とした大きな公孫樹(いちょう)の木の根元に腰を降ろして昼を使う事にした。
四つ（十時）頃か。昼には早いが、朝餉も取らずに二刻（四時間）以上も山道を駆け通したのだ。竹筒の水で口を湿すと、竹皮の包みを開いて、綾野の拵えてくれた大きな握り飯を頬張った。
「上手い！」
思わず声を上げていた。
「お侍様。儂らも此処で茶を使うて良う御座りまっしょうか」
振り向くと、さっきまで少し離れた畑で農作業をしていた百姓夫婦が立っていた。
「おお、構わぬぞ」
見ると、野地蔵の傍らには弁当や手荷物が置かれていた。
「某(それがし)の方が割り込んだようじゃな」
「なんのなんの、気になされんで良かが。それより茶でも飲まれんですな」
なんと、小さな火鉢に炭が入り湯が煮えていた。
「暖かい茶を振舞ってくれるとな？これは有難い、野点とは何よりの馳走じゃ」
そう言って百姓の女房が煎れてくれた茶を喫しながら、これから先の塔の瀬の事を尋ねた。
三年近くの参禅修業の折り、右京之介は古処山から馬見山を越えて

嘉麻峠へ、またこの江川へも何度降ったが、その間を繋ぐ塔の瀬へは足を踏み入れたことが無かった。
以外に物知りの百姓は、塔の瀬の大凡の地形などを一通り話した後、平安の末、源平の武士が台頭して来た頃に、源頼朝・義経等兄弟の叔父に当たる源為朝が放蕩の末九州に追放され、鎮西八郎と名乗って九州の諸将を配下に付け、その威風を都まで轟かせていたが、父・源為義の左遷を遠く都より伝えに来た母が、為朝が陣を張っていたこの地で没した為、その供養に塔を建立したと言伝えられ、それが塔の瀬の地名になったのだと、自慢げに話してくれた。
その間にも時折旅人が往還を行き来していた。
「馳走であった。礼を申す」
茶を喫し終え、半刻程休息を取った右京之典は礼を言うと、再び往還に出て塔の瀬へと向かった。
鶯が鳴き、所々に葉を落とした柿や櫨の木が中程まで枝垂った小石原川の流れに沿った往還を行くと、谷は深く遥か奥まで続き、右手は川岸まで山肌が迫り、左手は往還と山の端の間に僅かばかりの田畑があったが、上るにつれてそれも次第に無くなり、左右の山肌がくっ着きそうな程に谷が狭まった。
九十九折に曲がりくねった道の一間程の道幅は変わらなかったが、やがて左手は切り通した崖が迫り、右手は谷底まで十間はあろうかという険しいものへと変わっていた。
（早まったか…）
右京之典は未知の道程を選んだ事に少なからぬ悔悟の念を抱いた。
（しかし、そうせねば曲者どもを誘き寄せることは出来ぬ）
そう己に言い聞かせ、五感を澄ませた。急ぎ旅の途中、敢えて半刻もの休息を取ったのは相手に準備の時を与える為であったのだ。
何処からとも言えぬ気配を感じて、右京之典は懐の手裏剣帯から手裏剣を抜いて両手に隠し持った。
半里も過ぎた頃か。少し先の、左手から崖状の尾根が大きく突き出し、その尾根を回り込むように切り通した道が右へ大きくうねった

突端の外側に、谷に向かって弧を描いて迫り出した土地があった。
幾本かの背の低い雑木や枯れ薄に囲まれた幅三間、奥行き二間程の三日月型の一角にはまるで何かの礎石のような苔むした大石があった。
近づくと縦横四尺程もある大石の上には、一回り小さい平べったい別の石が載っているように見て取れた。それは礎盤にも見える。
（もしやこれは、先ほどの百姓が教えてくれた、鎮西為朝が母の供養に立てた塔とやらの跡ではないか）
（ならば…）
と右京之典が道を逸れて、その一角に足を踏み入れようとしたその時、
―ごごーっ―
轟音に振り向くと、なんと左手の切通しの崖の遥か上方から幾本もの丸太が大小の岩を巻き込んで一塊となって転げ落ち、山肌に張り付く様に生えた潅木を薙ぎ倒し、その真下の右京之典に襲い掛かからんとしていた。
右京之典更はその刹那、崖の上の茂みの陰に確かに二人の曲者の陰が動くのを見た。そして左右を確かめると、右手の二人の旅人に、
「逃げよ！」
と叫び、自らも逃げ口を探した。
その一瞬の中にも、丸太と土石の荒れ狂った流れは、更に土石を巻き込んで五間もの幅となって狂乱怒涛の如く雪崩落ち、右京之典の眼前に迫って来ていた。
その土石流が右京之典を正に呑み込もうとした瞬間、身を翻して礎石の陰に飛び込んだ。
―ごごっーー
谷間を揺るがし、轟音と共に土石の流れが谷底に落ちていった。
その直後、土煙が立ち込めた中から右京之典は猿のように礎石の上に飛び上がると、左手に持った手裏剣を前方へ擲った。
なんと、そこには彦山詣での白装束を着た男が杖に仕込んだ白刃を

引き抜き、右京之典の方に駆け寄っていた。その者は土石が襲い来る時、右京之典の後方を歩いていた男であった。
―きぃーん―
仕込み杖の刃を煌かせ、曲者が手裏剣を払い除けんとしたた時には既に、右京之典は礎石を蹴って、右手を太刀の柄に掛けて宙空へと跳び上がっていた。
鞘から迸り出た兼光の刃が一筋の光芒となって弧を描き、曲者が振り上げようとした右手に持った剣先の峰を左足で飛乗るように押さえ込みつつ、眼にも止まらぬ速さでその首筋を正面から刎ね切り、次の瞬間には、曲者の左肩を右足で踏蹴って向こう側に着地していた。同時に、右京之典の口から小さく言葉が吐かれた。
「居合法、猿」
倒した相手を振り返りもせず、血振りを呉れながら崖の上を見たが、そこには最早、曲者の気配は消えていた。
刀を納め、左右を確かめると、先ほどの二人の旅人が呆然と立ち竦んでいた。
「大事ないか」
「は、はい…」
商人の主従と思える風の二人は顎をがくがくさせながら返事をした。
「それは良かった。某は秋月黒田家家臣・新免九郎右衛門が家の者。この怪しき者は昨夜城下を騒がせたる盗賊に付き成敗致した。亡骸の始末と道の修繕も必要であろう。某は急ぎの御用旅故、済まぬが山を降りたら御城下入口の木戸番衆にこの様子を知らせて貰えぬか」
「は、はい。良う御座ります。新免九郎右衛門様の御方にご御座いまするな」
「左様。崖崩ればかりか斬り合いまで見せて仕舞うて、相済まぬ。許されよ」
あまりの驚愕に惑乱していた二人も、素直に頭を下げる右京之典の誠意の籠った言葉を聞いて、落ち着きを取り戻した。
「とんでも御座りませぬ。お声を掛けて頂いて居らねば、私共は危

うく巻き込まれて今頃は谷底に落ちて居りました。手前は甘木町で蝋問屋を営みまする佐野屋の主で平右衛門。これなるは手代の峯吉に御座います。確かに御番の衆にお伝え申します」
「宜しく頼む。気を付けて行かれよ」
主従が頭を下げ、往還を再び下って行った。
曲者の亡骸を礎石の横に引きずり、合掌した右京之典は礎石の前にしゃがんだ。
見ると、無残にも礎盤は無くなり、全体をびっしりと覆っていた苔も殆ど毟り取られていた。その毟り取られた石肌に微かに幾つかの文字が彫られているのが見えた。その中に、
―為―
らしき文字と、そして、
―母―
との一文字が読めた。
それは、摩滅して殆ど消えかけていたが、確かに母と刻まれていた。
（母上様。御助け下されたので御座りまするか）
昼餉の時の百姓が言った、鎮西為朝が母の供養の為に建てたという塔は正しくこれで有ったのだ。
右京之典は、母の加護を思い、数百年も前に亡くなった為朝の母と、その後父を助けて保元の乱に敗れ斬首になったという為朝の霊に謝し、その菩提を祈った。
「あと二人」
右京之典はそう呟くと、往還に戻り、再び歩き出した。

豊前国と境を接し筑前国の東南端に位置する上座郡小石原村は、日本三代霊場にして九州一の霊場・英彦山を後ろに控え、北は上方から下って九州への入口となる小倉から。南は南西の諸国。北西からは福岡、博多、唐津や肥前。そして南は西国筋郡代の置かれる日田へ。東は海を持つ豊前の諸領を結ぶ幾つもの街道が交差する交通の要衝であった。

よって、見渡す限り周りは全て山の、その峰々が会する高所に位置し、冬は雪深く、まるで隠れ里のような山間の小村でありながら、行く人は絶えず、旅人や彦山への修行・参拝の人々の為の飯屋、旅具を売る店などが少ないながらも軒を連ね、小さな町屋を形作っていた。

塔の瀬の難所を越えて小石原の町に入った右京之典は町の中ほど、豊前街道と秋月道の交差する辻に間口を広げ、旅具や小間物とともに茶や喰い物を売る店に入った。

刀を抜いて縁台に腰を下ろすと、

「いらっしゃーい」

「餅を二つとな、茶をくれぬか」

「はーい」

小女の一人が間延びした返事をして、直ぐに戻って来ると、

「はーい、お餅でーす」

と黄粉の付いた大きな餅を置いていった。

（これは美味しそうな）

中に小豆の餡がたっぷり入った餅を頬張りながら店の中を見渡すと、旅具の中に絵地図があった。それは英彦山を中心とした、修験道場や道順、それらを取り巻く町や宿場を表した俯瞰図のようであった。

そこに再び小女が、茶を持って現われた。

「お待たせしましたー」

「あれは、この辺りの地図かな？」

「そうですけど」

「修験者の通る山道が書かれておるな？」

「あっちで旦那さんに聞いてくださーい」

と言って、旅具が並んだ奥にある板の間を指した。

そこには、この店の主と思われる中年の男が座っていた。

右京之典は喰い終えた餅と茶の代を払うと、旅具の並ぶ所に行った。

「主殿。この地図は修験道場の道順が描かれておるようじゃが、ちとお尋ねしたい」

「何で御座りましょうか」
「某は日田へ向こうて居るのじゃが折角故、厳しき難所を選んで修行の足しにしながら行きたいと想うて居り申す。その様な路程が載って居ろうか？」
「左様に御座りまするか。これな絵地図なら、小石原から英彦山の方に十町も行きますと行者堂が御座りまして、そこから尾根伝いの道が南へ伸びて、大日ヶ岳、釈迦ヶ岳と険しい難所を通りまして再び御領内・宝珠山村の合楽という枝村に降りまする。途中には、行者様も法螺貝を腰に吊るして通らねばならぬ笈のつり・貝のつりと申す難所。切り立った峰の上に二尺ばかりの道が続いて両側は目も眩むような崖という糸が峰と申す処も詳しく載って居りまするが」
「その道を通って日田まではどれ程掛かろうか」
「左様で御座すなぁ…。釈迦ヶ岳まで半日も掛かりはしますまい。後は降りに御座りますれば半日程に御座りましょうか」
「左様か。ではこの絵地図と其処な杖を頂こう」
「畏まりました」
店の主に品代を払い、絵地図を広げながら右京之典が更に尋ねた。
「日暮れまでにどの辺りまで行けようか？」
「これからに御座いまするな！」
主が驚いて聴き返した。道慣れた修験者か余程の御利益を望む者でなければ、昼を過ぎてからその道を踏む者は先ず居ない。
「左様。修行の身故。それに時間が無いでな」
「それは釈迦ヶ岳の辺りまでは行けまっしょうし、其処まで行けば仮小屋も御座ります。されど、その前の糸ヶ峰、笈つり貝つりなどの難所を日暮れ後の暗い中通るのは危のう御座りまするが…」
「おお、夕暮れに難所を通り、仮小屋もあるとな。如何にも険しそうじゃ。修行には打って付け、ちょうど良い。早速出立致そう」
そう笑って言う右京之典に店の主は半ば呆れながらも、
「何、修行故と申されますな。お侍様が行者様並に山道をお行きなさるなら、問題は御座りますまいが。ただ、夕暮れに難所に差し掛

かるくらいがちょうど良いと申されますなら、少し早よう御座りましょう。奥で少し休んでお行きなされ」
店の主はそう言って、奥の板の広間を指した。どうも、旅人や英彦山詣での人々が泊まったり仮寝をする所らしい。
「道順や泊まり小屋、難所の詳しい事などお教え致しましょう」
「それは忝い。お言葉に甘え、休ませて頂こう」
主の名は茂太夫といい、隣の鼓村の出であるらしい。半刻余り（約一時間）、路程について様々に教えを受け八つ半頃（二時頃）。出立する事にした右京之典に主の茂太夫が、
「灯具はお持ちで御座りますな？」
「懐提灯と蝋燭ならば持参致して居るが」
右京之典が答えると、茂太夫は二寸四方程で長さが三寸程の茶色の塊を二つ、旅具の並ぶ棚から手に取った。
「これなる蝋燭をお持ちになりなされ。灯心がなく、蝋全体に油を染み込ませた大鋸屑を混ぜて拵えて居りますでな、火も大きく風にも揺れにも強く、地面でも岩の上にでもそのまま立てられまする。このように重ねれば、そのまま下の方にも火が繋がりますでな」
「それはよい」
「こうして横に並べて火を付ければ、糒を炊く位は出来まするぞ」
「それは重宝じゃ。是非とも頂こう」
右京之典が休み代と蝋燭代を払おうとするのへ、
「お若いのに感心に御座りますれば、御報謝に御座りまする」
と主がただで呉れるようとするのを一旦、右京之典は断りかけたが、主の真摯な眼を見て、有り難く頂戴する事にした。
それを押し頂いて道中嚢にしまうと、両刀を手挟んだ。
「然らば遠慮のう頂戴致す。有難う御座った、それでは参る」
杖を手に往還へ出た右京之典に茂太夫が、
「お気を付けて行かれませ」
と送り出してくれた。
「笈つり貝つり、それに糸ヶ峯の絶景。楽しみに御座る」

そう言って深深と頭を下げると、茂太夫が教えてくれた修行道の出発点、行者堂へと向かった。
わざわざ表まで出て見送る茂太夫に、後ろから、
「お父っつあん。あたしが一度お遍路に物をあげたら、英彦山に詣でて灼たかな霊験を頂こうというのに、それに必要な物を只で貰おうとは間違いじゃ、と怒ったくせに…」
普段の吝嗇を皮肉くるつもりの娘の言葉を、
「あのお方は只のお方ではないのじゃ！」
と言って、尚も喰い下がろうとする娘を制し、店の中に戻っていった。

五章、塔の瀬越え（後書き）

霊場・英彦山。行者も尻込みするほどの、切り立った峠を行く右京之典を、次第に怪しい気配が囲む。危うし！右京之典。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8147f/

『聖剣の門』 -秋月円命流奥伝- 巻の一

2010年10月9日18時24分発行